
IS Ichika & Stand user 一夏とスタンド使いと

stand user

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS Ichika & Stand user 一夏とスタン
ド使いと

【Nコード】

N1557S

【作者名】

stand user

【あらすじ】

この物語は、この世界において一人しかない誰にも見えない力の象徴を扱う女装癖の少年が、親友の愚痴を聞きつつ、時々手助けする物語である。

—— 基本的に原作準拠ですが、進行するにつれて原作を離れていきます。そして、一部原作人物が超強化されたりします。

また、オリジナル主人公が原作キャラと最終的にくっつきます。
最初IS学園の描写がかなり少ない状態です。
そして、更新ペースはかなり遅いです。
そういう事が許せる方のみご覧下さい。

プロローグ（前書き）

基本的にES学園サイドは原作どおりなので描写がありません。

まったりと不定期に進行していきます。

ブローグ

「一夏、遅かったね。どうしたんだもう受験は終わってしまったわよ?」

そう言いながら、再試験通達届けを差し出す。

さきほど、藍越学園の入学試験が終わり一夏の姿を探し回ったのだが、まったくみかけなかったので、

部屋から出て受付けに聞いたところ、欠席との通達があった。

家を出たと携帯で連絡をもらったので、どうせ試験会場を間違えたオチだろう。

こんな事なら一緒についてくるべきだったか。

親友の名前は織斑一夏、フラグを立てて立てて立てて立ててまくる男だ。

紹介は必要ないかもしれないが、私の名前は常城楔、ごく普通の女装趣味の男子である。

他にもちよつとした妙な幽霊を操る能力を持っているが、概ね常識の範囲内だろう。

「ああ、楔か」

「どうしたの?随分とやつれてるけど——まるで絶対に有り得ない事を実行して、

詰め寄られて質問されてようやく解放された顔つきだけど」

「概ね正解だ」

半分くらい冗談だったのにドストライクだったらしい。

しかもドンドン暗くなってきた。

「俺、【IS】を動かせちゃった」

時間を止めた覚えが無いのに、時が止まった。

【IS】——正式名称【インフィニット・ストラトス】であり、宇宙空間での活動を想定して製作されたマルチフォーム・スーツである。

しかし製作者の意図とは別に宇宙進出はまったく進展せず、その膨大なスペックをもてあました機械は

【兵器】へと変わり、各国の思惑から【スポーツ】にと落ち着いた所謂飛行パワードスーツである。

しかし、この機械には致命的な欠点があつて、女性にしか扱う事ができないのだ。

「実は女だったのかお前、初めて会ったときから好きでした（冗談）！！」

と突っ込んだほど驚いてしまったのだ。

いや、スマン錯乱してるな俺、ごめんなさいミナサマ、こつち見ないで下さい。

その女子面白がつてみてるんじゃない、俺が男だと知らないようだな。

ちなみにどうやら好きでしたの部分しか聞こえなかったらしい。

「既に心に決めた奴が居るんだ！すまん」

と暴露話をされた。

一夏も相当混乱してやがる。

周囲の女子は黄色い歓声を上げ（一部信じられないといった感じの

悲鳴）、男子は感動した！

と言いながら視線で拷問し始めた、知らない他人なのに皆ノリがいいね、ちよつと感動したよそこ。

いやいや、視線で拷問するなよ前ら。

尚、追記しておくが、女装趣味ではあるが俺は普通に女性が好きである。

親友の一夏も悪くは無い奴だし、あつちにその気があつたら少し考えたかもしれないがあつちもノーマルである。

「まあ、それはさておき面白い冗談ね」

「冗談だつたらどんなに良かった事か」

放心状態を見る限り、本当のことなのだろう。

「拙い事を言い出す前に帰るぞ」

そう言つて、今も放心状態の一夏を引き摺りつつ、足を速めた。

今度は周りからどういつ目で見られているのだろうかと気になった事なのだが、

今は安全に家に帰る事が重要事項である。

今聞き出したとしても何も言う気力が無さそうであるので明日学校で問い詰めるでしょう。

翌日のテレビのニュースには唯一【IS】を動かせた男として一夏の名前が表示されていた、情報早いね。

しかも隣の家の前にマスコミがたくさん居るし困ったねこりゃ。

「はいはい、携帯の充電器と着るための服一式でいいんですね千冬さん」

『そうだ』

結局、学校には登校してこなかった。

政府の保護下に入り、会えなくなってしまった為だ。

まあ、世界中で唯一「IS」を動かす事の出来る男なのだし、国や研究機関にとってはぜひ確保したい人材である事に間違いないだろう。

電話の相手、一夏の姉である織斑千冬さんの話によればIS学園に入学する為の試験を

受けている真つ最中であるらしい。

そして、仕方が無いのでマスコミに見つからないように地面を掘り進んで家に入り込み、

一夏の服を片っ端から入れ込んでいるのだ。

暫くは自宅通学という通達があったようだが、結局強引に寮にねじ込むようになったようだ。

「そっいや、千冬さん」

『どうした』

「IS学園って女子学園ですよ、ISの機能上」

『そっだな、大抵女にしか扱えない事になっているが、それがどうしたのか』

一夏のトランクスをでかいバッグに詰め込みながら話を続ける。

無地の奴しか置いていない、まあ別にいいと思うけど、プレゼント代わりに何枚か

購入しておいたものも混ぜ込んでおく。

そして古い電話帳の横に並んでいた明らかに捨てる事前提のＩＳについての

参考書のようなものも、絶対に読み込む事！と張り紙をしておいて鞆に詰め込む。

「風呂やトイレはどうするんですか？トイレはまあ仮設で大丈夫かもしれませんが、

風呂に入らないとつかれて取れないですよ？

ただでさえ女子に囲まれて精神的に死にかける事が確定してるのに」

一応、一夏が通う事になるので、色々と周辺地域を見てみたが、コンビニはあったものの、

銭湯らしきものは見当たらなかった。

コンビニなら男子用のトイレもあるので、最悪仮設がいやなら、こちらへと向かえばいいだけだし。

『————スマン、一度切る。業者に頼み込まねば。更衣室だけしか用意してなかったな』

「まあ、見落としやすい部分ですしね」

これできっと一夏専用の風呂が出来て、風呂覗き覗かれイベントは発生しなくなるだろう。

邪魔するわけではなく、純粹な親切心だ。

想像するなら良いシチュかもしれないが、実際に身に降りかかったら学園で完全に村八分状態になってしまうかもしれない。

ただでさえ、女尊主義の風潮が流れて女子しかない環境なのに、そんな事になってしまったら、ストレスで過労死してしまうだろう。

「っと、ピッキングしようとしてる馬鹿いますけどどうします?」

『適当に見せしめ風に制裁を加えておけ』

そう言っただけで切られた、業者に連絡する為なのだろう。

服も十分、格好が良くなるようなものだけ入れたことだし、さて、とつと不法侵入者の馬鹿に制裁を加えに行くとしますかね。

「こんちわ、おっさん」

声をかけると、ビクリとおっさんが背を震わせていた。

大方、この時期には誰もいない筈、とも思っていたのに誰かがいたこと自体が信じられなかったのだろう。

そして、今俺の格好は完全に女である。

警察に突き出されれば、完全に俺の方が有利だと悟ったのだろう。あ、武器出しやがった。

「て、抵抗するな!どうせお前も俺と同じだろう!」

「ところがどっこい」

そう言いながら、期間限定ではあるがIS学園関係に関わる事を許可する政府発行の許可証を

見せる……つっても一夏の荷物を纏めて届けに向かう時限定の処置
だけだね。

あ、流石に服だけでは可哀想だから適当に何か漫画でも詰めてやる
か。

「な、ななな」

「それとこの家の家主直々に制裁を加えろと言われたので――
ちよつと八つ当たりさせてもらうぞ」

そう言つて、20メートル離れた位置に居た男を奇妙な幽霊達の内
の一体で殴り飛ばす。

見事に玄関から飛び出した。

離れた位置に居たのでそんなにパワーのある奴が使えなかったが、
人を殴り飛ばすには十分だ。

「ディスクディスク、奇怪な行動を取らせておけば、警察の世話
になるしかないだろ」

そう言つて、奇妙な幽霊から円盤状の物質を受け取つて、男の頭に
挿入させておいた。

ここだけ見てれば、脳を挟られているので死んでしまつと誤解され
るかもしれないが、

実際には脳に命令を直接入力しているようなものである。

「警察署の前で裸踊りを捕まるまで実行してろ」

翌日のテレビのニュースと新聞の一面にはかなりモザイクが掛けら
れていたり、

上半身しか写されていない哀れな男が飾られたらしいが、特筆する

事でもないだろう。

「さて、漫画は何を入れようかなあ」

鞆を荷物ごと薄っぺらい紙に収納しながら、先を急ぐ。

指定された時刻にはまだまだ余裕があるので、数十冊程度を選んで買う余裕があるはずだ。

少々高い買い物だが、餞別として割り切っておけば我慢できる。

「千——織斑千冬さんに荷物をお届けに参りました常城と申しますが」

「えーっとちょっと確認を取って来るのでお待ちください」

流石に今日だけは趣味の女装をするわけにはいかないので法事用に購入していた

藍越学園の男子学生用の制服を身に纏っている。

鏡で見て思ったのだが違和感バリバリの服装だ。

一瞬、服装が違いますよという目で見られたが、残念ながら自覚はあります。

女装暦が長かったから、男子の服装が恐ろしいほどまでに似合っていない。

これからは女装は少し自重する方向でいくべきか……いや、たかがこの程度で

自分が貫き通すと決めた道を踏み外すわけにはいかないな、うん。

それにしても許可証見せるだけで簡単に通れたのだが、ここの警備

は大丈夫なのだろうか。

「またせたな」

「織斑さん、これ荷物です、あと外の警備員に許可証もお返ししますね」

そう言って鞆を引き渡す。

ちなみにここで許可証を返そうと思ったのだが、学園内なので下手したら

女子生徒に見つかり不法侵入者として警察に突き出されるかもしれない。

「ああ、ついでに暫く実家の方の管理を任せる。そっちの方は別の許可証を送っておくから

万が一見つかったても不審者扱いはされない為につけておいてくれ」

「任されました」

敬語主体なのは、仕方が無いのだろう。

ここは公の場なのだから、まあ、私生活においても千冬さんには敬語主体なのだが。

「それと、似合っていない男子の服は」

「自覚はあります」

職員室の人間のほとんどが首を傾げていたが、まあ、女装の俺を見

てないから

仕方が無い事なのだろう。

「少しは男子の服を着て馴染ませろ」

「織斑さんの頼みでも無理です」

三つ子の魂百まで、三歳の頃からしていた女装を掌を返すように否定するなど、

もはや出来はしない。

おっさんになって明らかにきつくなるまではこの女装の道を貫いてみせる。

女性にばれたら今の世の中ではあつという間に警察の世話になるのが確定しそうだが。

「まあいい、ご苦労だったな。今から会議なのでさっさと職員室から

出て行くように」

「はい、ではお仕事頑張ってください織斑さん」

そう言つて道草を取る事無く、学園の外に向かい警備員さん同伴のもと

外に出て許可証を返還しておいた。

もう少し見て回りたかったが、あまりうるちよろしても仕方が無いので諦めた。

「一夏、どうしたのよ。入学初日に電話してくるなんて、もう女子学園に

参ったのかしら？」

『聞くだけや想像するだけなら天国でも実際に受ければ地獄なんだよ。』

後できれば男口調で頼む、暫く女口調は聞きたくない』

「……ふう、やれやれこれでいいか？、一体どうしたんだこの野郎、随分と疲れた口調をしてるが」

『実はな……の前に服とか娯楽用品ありがとうな』

「どういたしまして」

電話口から疲れ果てた親友の声が聞こえる。

初日でそれでは数日のうちにダウンする確率が高いだろう。

もしくはストレスによって胃に穴が開いて入院してしまうかもしれない。

心配だが、いくら何でも俺自身が入学できるわけがなく、冥福を祈る他無い。

『さっきまでかなりの人数の女子に突撃自己紹介されてたんだよ』

「想像するだけなら羨ましいポジションだぞそれ爆発しろ、いや爆発させてくださいお願いします」

『物騒な事を頼み込んでるんじゃない!!』

「はっはっは、安心しろ冗談だ」

割り綺麗な土下座をしたにも関わらず、拒絶された。

何故だ!……まあ、電話だから見えないんだけどな。

それと同時に自分の隣に佇んでいた存在を再び消しておく。
見えないって便利だね。

「まあ、一週間や一ヶ月が過ぎればきっとそういう事態も消えるだろうさ。」

国とかにお前を確保する為に誘惑しろと言われた連中以外」

『……やっぱりそうだよなあ』

電話口である為表情は見えないのだが、きっと遠い目をしているに違いない。

今度会った時にでもいろいろと奢ってやろう。

ゲーセンやらどっかの食事どころで……気晴らしになるような施設を模索しておこう。

『そっかいやそっちの学園はどうだ?』

「何事も無ければお前も俺と通う筈だった藍越学園の事か?

まあまあいいところだぜ……女性思考主義者は当たり前のようににいるけど」

『あー』

ISの影響でこの世界は女尊男卑の世の中になってしまった。どっかの誰かが、「元始女性は太陽であった」とか言ってたけど、その人に見せたらきつと大歓喜するだろうね……いや、もしかしたら嘆くかなあ？

そのうち「元始男性は太陽であった」と唱え始める人が出てくるかもしれない。

つか、むしろ俺が唱えておきたい……ムカつく女子生徒にはちょっとささやかな

ばれない復讐をほどこしておいたけど、具体的には授業中、ずっと耳元で蝉の鳴き声が聞こえてくるとか。

「男子は肩身が狭い、明らかに女子が悪い事態でも全部男子のせいになるんだぜ」

『こっちより数倍マシだ……』と思ったが、確かにそこだけ聞くとこっちがマシに思えるよ』

それは確かに……一夏の通う学園は女生徒だらけだものな。

……人権なしとか、そういうのがおきてたりして。

授業中は廊下を立ったままだったり、トランクス一丁だったり、拳句には

椅子扱いされているとか……最後のはどっかにはご褒美なんだろうが。

「苦労してるんだな」

『なんだろう、今すぐお前を殴らなきゃいけない気がしてきた』

失礼な奴だ。

せつかく心配してるというのにこの扱い。

「でも世界でただ一人の【ISを動かす事の出来る男子】なんだから

ちゃんと通え、あーっと、休日には出てくれるのか？」

ちなみに親友の通っている【IS学園】とやらは、

世界的に定められているIS運営協定【IS操縦者育成機関について】の項目より抜粋して説明すると、

ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び運営資金調達などには原則的に

日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する

義務があり、また黙秘・隠匿を行う権利は日本国にはない。

また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国自体が理解できる解決を

する事を義務付ける。また、入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に

門戸を開き、また日本国での生活を保障する事——となっている。

簡単に言えば、運営資金とか日本で用意して、技術よこせ、隠すな、何？理不尽だと？

馬鹿いうな、日本が作った技術のせいなのだから日本で責任を取るべきだろ、という事である。

『まあ、一応買物やら何やらで出る事は出来るけど』

「だったらその時にでも気晴らしに町で遊——」

『じゃあ、来週の日曜日で』

「即答!!?」

と言いつつ、すぐさま十メートル離れた位置のカレンダーの日曜日部分に赤いマジックを投擲する。
よしど真ん中。

明日はきつといいことがあるといいなあ。

「ところで何で来週なのさ」

真つ当な疑問だと思う、気晴らしするなら今週すぐにでも実行に移すべきだろうに。
こちらとしても用事は無いのでバリバリ遊べるぞ。

『来週にはイギリス代表候補生との一騎討があるんだ。だから今週は特訓で潰れる』

.....

.....

...

一体何があった。

ていうか、喧嘩を売ったのか? 格上であろう相手に?
イギリス代表候補生って事は――

「セシリア・オルコットねえ。

大丈夫か? お前、確か入学試験の時に動かしたただけだろう」

『ああ、どうしようか悩んでいる』

だから今週の土曜日・日曜日も特訓の時間に当てるつもりなのだろう。

だがしかし――

「特訓するとしても大丈夫か？代表候補生って事は」専用機持ち
”なんだろう？”

『……………そういえば名前も含めてなんで知ってるんだよ』

「いや、テレビや新聞、雑誌とか見てれば分かる事だろうに。流石に容姿や

専用機の種類の情報知らないけど」

電話の向こう側で何かが刺さるような音が聞こえてきた気がした。
おまけに「何でお前じゃなくて俺なんだ理不尽だ」とか聞こえてきたが、

聞き流す事にしよう。

親友が地獄だと言っていた場所に行くほど酔狂ではない。

「まあ、がんばれー。きつとお前なら負ける」

『そこはせめて勝てるって言うてくれ！』

「努力知識戦略操作性経験、そして何よりー！何かが足りない！
！」

最後に上手く当てはまる言葉が見つからなかった。

『最初の部分は否定できないが、その何かって何だよ!!?』

「知らん、あ！熱意とかじゃないの？」

「こいつ今考えついた事適当に列挙しただけだった!？」という突込みがあつたが、普通に無視した。

図星付かれたからじゃないぞ！本当だぞ！

「俺は誰に向かって喋っていたんだ」

『いきなり何を言ってるんだお前は』

あ、声に出していたらしい。

まずい、誤魔化さねば、このままでは変人扱いされてしまう。あれ？でも既に手遅れっぽくね？

「気にするな男には色々あるのさ、分かるだろその辺」

『俺にはお前が時々分からなくなる時がある』

普通に呆れられた、まあ仕方ない。

これは妙な事を呟いてしまったこつちが全面的に悪い。

「ちよつと京都逝つて来る」

『行つてもいいが清水の舞台から飛び降りるなよ』

クソ！牽制された！さすが幼馴染半端ないな！

「I can fly!」を事前に察知し阻止しにくると思ひ

もしなかったぞ。

しかし止められてしまったから実行できないな。

「ま、頑張れよ。結果詳細報告ヨロシークー」

『ああ、じゃあまた——まった、ちよつと変わる相手が居る』

「何々？誰々？」

いきなり彼女でも出来たのかこいつ、それを惚気る為の盛大な前振りなのか、そうなのかちくしょう。

『もしもし』

どこかで聞いたような声が聞こえてきた。

いや、少なくとも少しは大人びた印象を受ける声だった。

「ホキホキ、六年ぶりだな。電話越しだけど」

『！ああ……そうだな六年ぶりだな』

顔をあわせられないのがあれだが……なるほど、IS学園に所属したのか。

まあ、箒の姉の影響つばいから仕方ないっちゃ仕方ないだろうけど、どうせ納得いかないから実力で入ったんだろうなあ。

「声、大人びてるなー。一瞬誰かわからなかったよ」

『すぐに看破したくせに……お前は変化無いな、変声期きてないのか？』

痛いところを突かれたでござる。

親戚の叔母ちゃんから不老じやないのアンタと言われた事が思い出されてくる――。

落ち着け、素数を数えて落ち着くんだ。

1と自身以外で割れない数字、俺に勇気を与えてくれると嬉しい。

「2、3、5、7、11、13、17、19……………」

『私が悪かった、だから戻って来い』

「1245750260153694554008555015

747995031227

9598515115184284367047566259

111523599739

73805597596066168459――えーっ

と忘れた、何？」

『中断したとはいえ数えすぎだ』

呆れられた、駄目だせっかく7361370桁の素数を言い切れる
かと思つたのに、

流石に無理か。

「で、どうしたの水キホキ」

『……………その呼び名は止める』

「……………時間の流れは残酷だな、昔は普通に受け入れてたのにさ。
しかもさっき言った時には

何にも反応を示さなかったじゃないか」

『それとこれとは話が別だ』

向こうの方でミシリという音が鳴った。

ヤバイ、このままでは一夏の携帯電話のライフがゼロになってしま
う。

別の話題をでっち上げないと駄目だなこりゃ。

「そうそう、女子から見てそっちの学園はどんな感じなのさ」

『……………女学院だな』

「もう少し何か無いのかホキホキ」

まんまな回答だった……昔からあまり喋るような娘じゃないので仕
方ないと言えば仕方ないのだけれど、

もう少し発展するような会話にしてほしいものだ。

お姉さん（偽）は大分心配なのだ、あまり友達も出来ていないので
はないかその様子では。

『お前は姉じゃないだろ、それに余計なお世話だ』

「なん……………だ……………」

心を読まれた、おのれ！新手の奇妙な幽霊使いか！

俺以外にも発現するまでに到るとは恐るべき事が起ってしまった。
これはきつと孔明の罠だ！そうに違いない！

過去に戻る能力が無いのが恨めしい、ちくしょう待ってる孔明、

なんとしても

抹殺しに向かってやるからな！！

『六年離れてても理解できるに決まっている。変わって無さそうだからな』

あ、何だ、勘なんだ。

心配してそんした。

「そこまで強烈なキャラだったか、俺って」

『『ああ、女装趣味の熱血系は忘れたくても忘れられない』』

「二人してハモルなこのやろう！？」

まあ、女装趣味の男子なんて印象が薄れるほどインパクトの低いキヤラクターではないからなあ。

それにしても、何でこの時間帯に二人して電話に出ているんだ？
夜の十時回ってる時間なんだが。

「ところでお二人さん、こんな時間に集まってるってどういうこと？」

『……学園側のミスだ』

「把握した。同棲中かこの野郎ども」

自然と携帯電話を握り締める力が強くなっていく。

同棲って事はうっかり裸を見る事が起りうる可能性があるだろう。

おまけに一夏はギャルゲ主人公体質だからどうせそういうイベント

が発生したに決まっている。

どうせ壊れてもすぐに直せるし別に良いよな、うん、電話を切ったら一旦携帯電話をぶっ壊そう。

『お前が想定するような事は一切起つて——無いからな!』

「間を空けるな、説得力が無いぞホキホキ。おのれ一夏、羨まけしからん!

しかも寝巻き姿のホキホキと一緒にだとお!!!」

ポラロイドカメラを叩いて破壊しながら写真を撮る。
破壊した後はキチンと直しておきました。
だって高いんだものこのカメラ。

『待て、何普通に念写使つてやがるんだ!!!』

『い、今の無しだもう一度機会をくれ!!!』

電話の話し相手が急遽変更され、一夏が怒鳴り込んできた。
そして、ホキホキの言う事が何かおかしい。

何やら、電話の方からごそごそと慌しく漁っている音が聞こえてきた。

「うわ、綺麗になつてゐるなあ」

『~~~~~!!!!!!』

『第!痛い痛い痛い!!!』

電話の向こうで木刀でバシバシ殴られる音や一夏の悲鳴が聞こえてきた。

ざまあ、とは思わない、流石に音がヤバイ。
でも何も出来ないの——

「すまん、明日も朝早いから切るぞ」

『待て、このままの状態で放置す——』

一夏の冥福を祈りつつ、俺はベッドへダイヴして眠りこけた。

翌朝、携帯には一夏と箒からの着信とメールが鬼のように来ていた事を追記しておく。

まあ、箒のメールと着信は最初誰なのかわからなかったけど留守番電話と最初のメールで

説明があつたので登録しておいた。

そつえば、何故か箒の方がメールも着信も多かったような気がする……。

自意識過剰だったらアレだが、もしかして俺に気があるのだろうか。

プロローグ（後書き）

主人公：常城【つねしろ】 楔【みそぎ】・男・15歳

原作以外の詳しい説明は一卷分の話終了時にまとめて説明がありません。

第一話（前書き）

サブタイトル考えるのが大変なので、サブタイトルは無しです。

第一話

「んー……知らないアドレスですね」

授業終了後の休み時間、授業中に届いていたらしいメールを確認する。

昨日登録したクラスメイトとも、筈とも違うアドレス。

一体誰が送りつけたのだろうか。

心当たりがあるとしたら一夏のいるIS学園で誰か親しくなった人物のメールアドレスかもしれないのだが。

「まったく分からない」

件名が無く本文内容はただ、一つだけ”IS学園”。

何の意味も無い、一体何なのか不明なメール。

誰かに相談しようにも警察は悪戯で済ませるだろうし、

IS学園に問い合わせようにも妙な疑いを掛けられても困る。

となれば相談相手が筈が一夏しか居ないのだが……打倒セシリアで忙しいだろうから

連絡できない。

念写を扱おうにもムラがあるのであまり頼りにはならない。

千冬さんに相談しようとも思ったが、ただでさえ色々な事を仕事として

行っているのに余計な事で煩わせるわけにはいかない。

「しばらく放置でいいですかね」

次の授業が始まる頃合である為、その謎のメールは放っておいた。

「そっぴゃお前その星型の痣って生まれつきか？」

体育の授業の着替え中、女子の制服を着こんではいるのだが、男子の更衣室で着替えている。

女子ものの下着はつけてはいないが、上半身を脱ぐ時にだけ、男子のほぼ全員が前かがみになる。

気持ちは分かるけども私が男って事を

鍛え抜かれた細いがかつしりとしておる肉体を見るまでその状態は続くのだ。

最初だから仕方が無いのだが、そのうちになれて欲しいものである。その中で肩に痣がある事に気がついた男子生徒がその部分を指摘する。

「ん、まあね。親には無かったから、俺だけしかありませんが」

「スマン」

無かつた”た”という過去形の地点で俺の両親が居ないと思ったのだろう。

間違いではないのだが、正確には俺の特異的な能力を不気味におもった両親に捨てられたのだ。

その後、叔母のところに預けられ、現在に到るわけである。

叔母の方は俺の奇妙な幽霊を扱う能力を見せてはいないが、気味悪がってはいないので快適だった。

まあ、喜喜として使用を許可され、色々な家事の手伝いなどをやらされていたが。

話したところで暗い雰囲気になりそうなので、気にしない気にしない、と言いながら、

下にジャージを穿き、カラカラと笑った。

その雰囲気当てられたのか、幾分か空気が和らいだ、うんお姉さん（偽）は暗い空気よりも
明るい空気の方が好きだぞ。

「お前って女装趣味だけどIS試験を受けたのか？」

「いやいや、女装してるとはいえ受けれるわけ無いだろ」

「意外にもその容姿に騙されて起動するかもしれないぞ？」

実際、簡易試験の会場を通り過ぎると受けていかないの？という視線に晒される事は多々あったのだが、一部を除いて男が操作できないので

普通にスルーしていた。

そもそも男が受けるな、となっていないとはいえ、受けに行く男子はそうそういないだろう。

ロボットものに多少懂れていたのだが、操作できないと分かって少々落胆したしな。

でも一夏が操作できてたし、いずれ男にも操作できるかな？

「男子はサッカーだっけ？」

「女子は外でチアリーディングですねー、誰が一番多く応援されるのかしら」

何故、女子に混ざらないという突込みが入ってきたが、流石に授業自体は男子の方を

優先させる分別ぐらいいついている。

それにチアだと、下がやばいじゃないか。

「万が一見えてトラウマになりたいならやりますが」

「……………スパッツがあるじゃないか」

何人もの男子が それ だ とか言っていたので、備品のサッカーボールを

投げつけて黙らせておいた。

信頼と実績のあるパワーとスピードと精密な動作が大の得意な幽霊さんにまかせて。

吹き飛ばず、程度に激痛を与える威力だから別に構わないだろう。足の小指に発射し、命中したのか体を硬直させて悶えているという器用な行動をとっていた。

「言葉を選べ、女装趣味とはいえノーマルなんだ」

男にはしる趣味など——— 多分無い。

「Sir Yes sir」

マムと言いきった奴は睨みつけて黙らせておいた。

「で、今度はどんな悩み相談なの」

『マジで敵意が無い男の声が恋しいです』

「どれだけ弱気になってるのさ！？もしかして朝のニュースが関係しているのか？」

『ああ』

朝のニュース、それは……簡単に言えば他にも男子適正者が現れ、実際に使用出来る状況になってしまった事である。

これによって一夏の不安も取り除かれるんじゃないかね？と思ったのだが、全員が全員、何故か一夏を敵視するような奴ばかりだったらしい。

男子連中はクラスは別々のようだが（多分独占禁止とかそういうのだらうと予測）、それでも

何もしていないのに睨みつけてくる三人の男に精神が持たないと弱音を吐く一夏。

うわあ、それは酷い状況だね、うん。

「そんな体調で大丈夫か？一週間後には試合があるんだろ？」

それも代表候補生と呼ばれる確実にエリートの者と。

『いつその事、お前も適正者となってこの学園に来てしまえばいいんだ』

「残念、まず触る機会自体無いから」

一夏のような偶然が起こりうる筈も無い。

普通は嚴重に保管されているので当たり前といっちゃ当たり前なのだが。

「それに俺が使えるという保障が無いだろ」

『大丈夫だ、お前は何処から見ても外見が女そのものだからきつと誤認してくれる筈だ。』

一緒に堕ちてくれ』

悪魔の誘いになってきている……味方だと思われた男が敵対感情を持っていたというショックから大分参っているようだ。

何か反論しようと思ったがやめた………確実に、いや絶対何らかのフラグが立って、路頭におちていたのが実は運送中に落ちてしまったISだったとかそういうオチが発生しそだったからだ。

これ以上特質な能力など欲しくは無い。

「まあ、応援するしか出来ないし愚痴ならいくらでも聞いてやるよ。ちなみに俺、今授業中なんだが」

学園によって授業時間が多少ずれるので、例に漏れず楔も授業中だ。それでも先生が睨むだけで許可しているのは、学年主席という立場と、電話の相手が数少ない男のIS動作可能者という事で、カウンセリングとして暗黙の了解の許可を与えているからである。

『のんびりしてるからそっちも休み時間だと思ったじゃないか！？ほ、放課後に掛けなおす』

「まあ、放課後まで暫く声を聞けない事態になるが頑張れよ。さつきも言ったとおり」

愚痴だけはいつでも受付中だからな」

そう言つて、電話を切つて授業担当の教師に謝罪のジャンピング土下座を敢行した。
そのおかしい行動に毒気を抜かれた為、課題倍増という簡単な罰だけで済まされた。

「はあ、男同士なんだから仲間意識があつても良さそうなんだがなあ」

「世の中、そう上手くいかないという例ですね」

学食でうどんをすすりながら、話しかけてくる友人に相槌気味に返す。

今日のうどん、昨日よりもコシが弱いな。

「メールで昼休みがどうなるのか聞いたけど、時間が合致しなかった。」

こっちが始まる頃にはあつちは終了している時間帯らしい」

「上手く回らないものだな」

よって放課後まで自分自身に気合を入れ込んで集中してもらっ他無いのだが、
本当に大丈夫なのだろうか。

「にしてもこのホキホキと登録してあるのは誰なんだ」

一日三回以上送られてくるメールの差出人の表示に友人が顔をしかめる。

といつても今日が最初だから一日三回以上つて言つのは今回だけだと思われる。

「ん？一夏以外のもう一人の幼馴染だよ」

ちなみにもう一人間接幼馴染が居るのだが、
もう一人の方とは結局こっちの都合と向こっの都合が合致せずに会えずじまい。

中学二年生の頃には故郷に帰ってしまったらしいし。
一夏はしっかりとフラグを立てていたらしい。

「女か……」

「百合かがわー！！？」

百合とか呟いた奴に玉子焼きをぶつける。

命中した時に玉子焼きとは思えないほどの音が響いてきたが気にしない。

「もしかして携帯の待ち受けの中の一人か？」

「そうだ」

携帯の待ち受けには四人の人間が写っている。

一人は俺で、残る三人は一夏・ホキホキ・弾である。

「ちなみにポニテの少女がホキホキだ」

「……えーつと篠ノ之箒って言うのか」

「お前、篠ノ之博士と面識は？」

「無い」

そう言えば、本名もキチンと打ち込んである状態だった。

ちなみにホキホキの姉には会えずじまい。

どんな人なのか分からないので、適当に空想で補完している。
多分、箒を大きくしたただけだろう。

「ちよつとそこの下級生の男子」

楽しい昼食の団欒の最中、首もとのラインの色が違う女子生徒が少し離れた位置で

こちらを睨んできた。

その瞬間、場の空気が冷めた。

「私食べ終わったから、コレ片付けておいて」

そう言つて食器をそのままに立ち去っていく。

確かに近くに居たのだが何故親しくも無い相手に体調も不利でない生徒の食器を

運ばなければならないのか。

「男女平等の前までの風潮の反動か」

「俺が片付けておこう」

前までは情勢は男女平等だったが、その前までは女子が下に見られる女尊男卑の世の中だったのだ。

遺伝子レベルで刻まれた屈辱が爆発して今の世界情勢に便乗している女子がいる。

さきほどの女子生徒がその例だろう。

聞く必要は無いのだが、席に置かれっぱなしでは他の生徒が座れない。

仕方が無いのでさっさと食器を洗い場に持っていこうか。

「げ、色々零してっぞあの女」

「行儀悪かったんですね、もしくは機嫌が悪かったのでしょうか」

機嫌が悪いのならばあの態度には納得がいくのだが。

それで俺達自身が納得がいくかというといくわけが無い。

とはいえ、上級生っぽかったので仕返しに向かおうにも離れてるし、既にイラツキで顔も覚えていない状態だったので諦めた。

顔だけでも覚えていれば音を貼り付けて仕返ししてやったのに。

「で、つい怒鳴ったと」

『そうだ、あの人のせいで色々大変な目に遭ったというのに…』

いや、会った事も無い人の話をされても困るんですがね。

一夏やホキホキ達と幼馴染なのに面識が無いって正直どうなんだろうか。

会った事はないが、ISの開発者であり、現在絶賛失踪中のホキホキの姉であるそうな。

そして、一夏達に聞いた話だと千冬さん・一夏・ホキホキ以外の人間を人間としてみないらしい。

しかも千冬さんの話だと両親は名前を覚えているかどうか怪しい具合だそうだ。

多分、俺があってもそこら辺に落ちている石扱いされるだろうとの事。

まあ、失踪中ならエンカウントしそうにないし、関わりあっても何か俺の平穩の危険度が

鰻上りになるだけだろうから別に構わないわけだけれども。

「ところで一夏は？」

『あの軟弱者ならダウンしてるぞ』

何があつたのだろう、どんな過酷な特訓をしたのだろうか。

電話の向こう側から微かにうめき声が聞こえてくるのが物凄く怖い。

「100kgの亀の甲羅を抱えて特訓したのか」

『——IS操縦に筋力是要らんぞ』

「でも体力・精神力とかは重要だと思うけど？いや、操縦経験無いから分らないけれど」

『まあ、その二つに関しては否定しきれないな、でもそこまでの特訓はしていない』

話だけ聞けばホキホキが施したみたいだな。
一体どのように特訓したのだろう。

「して、特訓メニューは」

『私との剣道の打ち合いだ。もっとも明日からは織斑先生がIS操縦の稽古をつけるらしいが』

おい、一方的になるだろそれ、一夏は中学の頃バイト三昧で剣道やる暇な買ったんだぞ。

それにホキホキは全国大会優勝経験者ではないか。
そして、一夏よ、よく訓練を取り付けることに成功したな。

「一夏は千冬さんにあまり負担掛けたくない一心で生活費を少しでも稼ぐって言って、

バイト三昧で剣道やる暇無かったんだけども」

『…………一夏はそんな事言っただけで、帰宅部皆勤としか』

うん、確かにそれだけ聞いたら軟弱者呼ばわり確定ですね。

一夏も理由さえ話しておけば軟弱者扱いされなかっただろうに……。

「俺も喫茶店働きだったなー」

『どうせ、おかしい喫茶店しか働いてないのだろう』

「えーっとメイド喫茶、巫女喫茶、魔法少女喫茶に極道喫茶だったなあ」

『店長も店長で何故、男を雇おうと思った————待て、最後のはなんなんだ！！？』

「店長は可愛いからよし！って言って雇ってくれたし、お客様にも男の娘！全然OK！

的な雰囲気だったよ？」

『駄目だそいつら、じゃなくて最後のはなんなんだ！？』

「え、極道が経営している普通の喫茶店だよ？従業員も普通の女性」

実際に職場自体も俺以外が皆”ヤ”のつく人間関係だったただけだし。客に対して尊大な態度だったし、でも特に客が問題を起こさなければ結構の良い態度だけだね。

でも、それとは関係無しに客のほとんどがぶっ飛んでたなー。

『楔、それは普通の喫茶店とは言わないぞ、というか繁盛していたのか？』

「怒鳴られたりするたび、恍惚とした表情をしてました」

『もういい、特訓の話だったな』

話していると精神が疲れてしまうと言いたげに話を区切るホキホキ。まあ、心配するなホキホキ、一般人に話しても疲れするというのは自覚はある。

『自覚があるなら最後の話は抜いておいてくれ』

「何で普通に心を読んでしまうのかと一生かけて問い詰めたい」

『い、一生！！？ななな何を言ってる！？』

今朝の疑問が確信に変わってきた。

何かホキホキ、俺に気がありそうだ………まあ、本人に言っても否定くらいそうなので

黙っている事にしよう。

間違ってたら間違ってたでこちらが恥ずかしいだけだし。

「そろそろ一夏が復帰したっばいから変わってもらっていい？

愚痴を聞く約束があるし」

『———そういえばそんな事を言ってたな一夏の奴。わかった約束は大事だしな』

「約束といえ、引越し前に聞きそびれた剣道優勝云々は日程と指示してないから、

先の大会の優勝でも有効ですよー」

光の速さで電話を切られた。

念写をしようかと思ったけど、流石に野暮というものだろう。

まあ、絶対真っ赤になっていると思われるのだが。

おっと一夏から電話だ。

『——愚痴を言う前に一つ……お前箒に何言っただ』

「約束が有効だといったただだよー」

何を要求されるのか、少々楽しみにしつつそう答えておいた。

予測では買い物に付き合っ、が精々だと思っただけだね。

「それより時間は有限なんだ、愚痴をお姉さん（偽）に言いたまえ」

『ああ——つとそう言えば風呂とトイレ関係ありがとうな。今朝完成したらしくて、

疲れをとり易かったぞ……まだトイレも風呂も仮設で寮の外つてのが問題だったけどな』

本格的なのはもう少し時間が掛かるそうな。

まあ、それでも風呂関係はシャワーよりもマシだろう、シャワーよりも風呂の方が日々の疲れを癒してくれる。

異論は認めない絶対だ。

『今日は授業内容に少し戸惑った……』

「何故に？」

『山田先生がISをぶ、ブラに例えて言った辺りから少しトラウマが』

半分近く俺のせいですな分かります。

確か中学の頃の罰ゲームで、俺と一夏が女装の罰を見事に引き当て、下着まで

装着させられたんだっけか。

そのためだけに店から購入してきた阿呆な男子の顔を鮮明に思い出せる。

「にしてもその先生、天然入ってるな」

『でも優しい先生だぞ、少なくとも姉さんよりかは。青くなった俺の体調を真剣に

心配してくれたし』

いや、顔色が悪くなったら誰でも心配するだろう。

しなかったら教育者として大問題だ。

まあ、こっちではこのクラスには居なかったが女性教員が少々頭がアレだったらしいが。

「そういや、男衆とはどんな具合だ？」

『……………相変わらず敵視されてる』

何やら呟いてる判定：Aが気になる。

え？もしかしてそいつらって判定：Aなのか？

随分と適正が高いな、一夏はBだったんだが……。

「理由は分らないのか？」

女子に囲まれているという理由にしてもお前らが言うなと言いつ返せる状況だし。

一夏にはの字の生徒に惚れてるのならまだ理由として挙げられるが。

『何か呟きながら睨みつけてくるだけだし、よく分らないんだよなー。』

でも俺よりも女子と親しく話てるっばいし』

そいつらも女子からはチャホヤされている状態ではあるようだ。

しかも一夏よりも馴染めている、と………余計に分からなくなってきたぞ。

「まあ、とりあえずそいつらは放置でいいんじゃないか、目下のところ

イギリス代表候補生との対決が第一なんだから」

『そうだな、一つの事に集中した方が力を出しやすいしそうするよ』

こいつは一つの事に集中させた方が力を発揮するタイプだったしなあ。

藍越学園に対する入試勉強も最初はE判定だったのが、一月でA判定となるようになっていたことだし。

「ほいほい、これから晩御飯と織斑家の清掃があるからとっと切るぜーい」

『……………何から何までスマン』

「気にするな、報酬はそうだな。勝利報告で手を打とう」

『昨日とは宣言違うな』

「経験で勝てないなら気迫で勝てて事で、負けること前提で進んだら勝てるものも勝てないって事を

思い出したからな。だったら精神では勝つという感情だけに集中しろ。

決して負けを空想するな、以上お姉さん（偽）の激励でしたー」

『分かった、絶対勝利報告をするぞ！』

「その意気だ！ー一夏ア！ー！」

『その決闘が終わったら、次の休みの時に勝利祝いしようぜ！』

「え、ちょ、一夏それは……………」

『明日には専用ISが届くらしいから、俺も勉強の方を頑張る、じゃあな』

敗北フラグ、もとい死亡フラグだと言おうとして電話を切られた。……………棺桶の値段っていくらだったっけ。

いやいやいや、その前に専用ISが明日届くってどういうことなの？
まあ、これで経験の差は少しは少なくなるだろうから有利になるだろう。

これ以上考えても仕方が無いので、俺は織斑家清掃の為、家を後にするのだった。

第一話（後書き）

原作乖離 1 ISの早期到着。

第二話（前書き）

アンチって訳じゃないけど、こういう世界だよね？

と言う感じで少し穿った解釈での描写有。

注意書きに入れるかどうか少々悩んでいます。

第二話

「NDK、10:0ダイヤのキャラで一回も勝てないってNDK」

「ねえ、大丈夫かしら弾。魂が見え始めているのだけれど」

日曜日、あれ以降特に目立った愚痴報告などは無く、簡単なその日の出来事を

列挙するようなメールでの連絡が主だった。

というか、言葉を話す気力がほとんど無くなっていて、ホキホキに連絡を任せる始末である。

ちなみに今俺は中学校の旧友達とゲーセンで遊んでいる真っ最中だ。アルバイトも入ってない状態で、完全休暇という訳で旧友達と親交を深めている。

今の学校の友人とは平日に遊んでいるしいつでも会えるので、休日だけは付き合いの長い連中とつるみたいのだ。

一応一縷の望みをかけて一夏も来れないのかどうか、わざわざIS学園のある町で

学園に一番近いゲームセンターで集合したのだが、筋肉痛で出られないらしい。

そして、物凄く休みたいそうだ。

仕方がないので、集まってきた連中の交通費は賭けに負けたので払っておいた。

勿論、帰りの分も渡してある。

「楔、仇を討ってくれ」

「だが断る」

そんなもの自分で克服してもらいたいものだ。

ただいま、弾は五十連敗。

正直ドン引きするぐらい負けている現状だ。

しかもその対戦相手は弾と同じ学校であり、昼の賭けをしているらしく、

50日間もの間、昼を奢り続けるという地獄のコースに突入している。

「くそ、もう一度だ………！」

「小遣い気にしなさいよね、弾」

しかも俺から借金してまでコイン投入中。

別に返済は利息をつける必要は無いのだが、3000円は結構でかい。

自腹で戦ってるのが2000円って、高校生で確かバイトをしておらず、

家の手伝いも少ししかしてないので小遣いがあまり無いとか嘆いてなかったか？

「あ、ごめん。貸そうと思ったけど今日の予算ほとんど使い切ったから無理よ。」

私クレイゲームしたいし」

「ぐ………」

他に借りる相手がないのか、項垂れてしまった弾。

居るには居るらしいが、十日で一割という暴利で貸す連中しか居ない為、
借りる事が不可能な状況だ。

「ねえ、一応聞くけど弾が払える時だけよね、奢るのは」

「まあ。まったく無い状態から奢らされるのは無理だしなあ」

金が入った瞬間、消え去っていく事が確定している弾に呆れつつ、
少しくレーンゲームに行つて来る、と言いながら席を外した。
どうでもいい事だけど、ゲームでも女性キャラが明らかに強化されてるのは
どうにかして欲しい、せめてゲームの世界でくらい男性有利にするべきだ。

「って、何で全員着いてくるの」

「いや、お前から離れると……………」

そう言いながら、周囲を見渡す旧友達。

……………なるほど、女性ばかりだ……………下手したら奢れとか強要してくる輩が

出てくるだろう。

一応、今の俺は外見が女な為か女性による不快な行為をあまり受けていないが、

周りの旧友達は違うのだろう。

まあ、俺の場合ばれたら即刻警察の世話になる可能性が非常に高いのだが。

「んー、目当てのヌイグルミを落としたら一旦昼にしようか」

「……………1ゲームだけかよ」

失敬な、500円で3ゲームするに決まってるじゃないか。
今日はどの子を狙おうかなー。
って、あれは。

「千冬さんのヌイグルミ、だと……？」

「口調が男になるほど驚くことか！？まあ、確かに驚くわなあ」
物凄く獲得するのに苦労する位置、明らかに素人目でも分かる取れ
なさ具合。

これに挑戦した輩は一体何人居るのだろうか。

「でも、一体しか居ないし、他にも取れた人がきつといるんじゃない
……………」

というか、いくら人気とはいえ、本人にちゃんと許可とっている
のだろうか？

聞こうと思ったけど、緊急事態じゃないしあまり電話する気にもな
れないんだよなあ。

「まあ、いいやせつかくだから挑戦……………」

《だーかーらー、何であんなに取り辛い位置にあるのよ！！千冬
さまのヌイグルミが取れないじゃないの！！

クレイゲーム限定なのよ！他のところじゃ見かけないのよ！
！》

《ですから、お客様。あのヌイグルミはそういう仕様でして》

《何よ！さっすが男ね、融通が利かないわ！！》

いやいや、クレーンゲームって金を出してヌイグルミを取るパターンだけさあ。

直接買うのはやはり反則行為のようなモノだし、取りやすくしていたら、

店側も大損失だろうに。

というか男女関係無いだろ。

「なあ、この場合訴えたら普通どっちが勝つ？」

「少なくとも女性の味方を引き入れないと無理でしょうねえ」

遠めで見える店員とこのクレーンゲームに挑戦していたらしい少女を見ながら

そんな会話をしていた。

しかも何やら、女性がドンドン増えて詰め寄っているような気がする。

女性達も取れずに諦めていたけど、詰め寄ってるのを見て便乗した口らしい。

「そういや、このヌイグルミ。都市伝説の奴かな？」

「都市伝説？」

「ああ、何でも地方に一つしか配置されていなくて、ゲームセンターを

転々としているヌイグルミらしいんだが」

「目撃情報はあるけど誰も獲得した奴はいないらしくて、今じゃ数億円叩いてまで買おうとする

輩が居るらしいって噂だぜ。

おまけに日本限定でしか出回っていないらしい。」

だったら、店員か店長の誰かがパクって、オクにでも出しそうなものだがねえ。

何か理由でもあるのだろうか。

「オークションに出したらあつという間に億万長者かねえ」

なんとなく興味が出たので、ちょっと挑戦してみるか。

「目指せ、レアヌイグルミ——」

さつそく、アームを動かす。

それと同時に幽霊さんの内の一人で精密な動きを可能とする存在を繰り出す。

腕とかはただ添えるだけ、絶妙な位置とタイミングを今までの経験から割り出し、

一度目の挑戦に入る。

難易度が激高なのは承知の上なので、まずどんなものなのかを判定する為、

捨てゲームである。

重心などを計測し、修正を加えていく。

コンマ1秒どころかコンマ00の領域のタイミングで止めて掴み取る。

「む、持ち上がったけど、ちょっとヌイグルミの重心が違ったか」

「……………声色が男になってるって事は真剣なんだな」

持ち上がったという言葉が届いたのか、急に店員に詰め寄っていた少女が

こちらを振り向いてきた。

少女の目の前ではヌイグルミが掴み損ねて落下している瞬間である。あ、信じられないという表情をしてるよ全員。

店員、お前もか。

というか、それほどまでに取りにくくて持ち上がらないってドンだけだよ。

「後1ゲーム捨てて絶対の確信を得ますかね」

「普通に捨てるとか言えるお前が凄いな……………なあ、後ろを振り向くのが怖いんだが」

「見られるだけで乱すほどお姉さん（偽）は柔じゃないわよつと」

確かに視線はあるけどそれでミスするほど俺の幽霊は甘くは無い。クレーンが初期の位置に戻ったので、もう一度挑戦する。

大体の重心はつかめたけど、確信を得る為にもう一度だけ挑戦する。次に確実に取ることだけを狙って。

「2、3、5、7、11……………13……………17」

気持ちを落ち着けるために素数でも数えておく。
誰も言葉を発しない状態で視線だけが向かってくるのはかなりくるものがある。

幽霊自体に影響は及ぼさないが、こっちが参ってしまう。

一夏の気持ちを一片だけが理解できた。

確かに女性ばかりに見られるのは精神的に参るかも分からんね。

まあ、こっちの場合には他にも店員や旧友のように男も混ざっているのだけど。

「19……23、29、31、37……」

固唾を飲み込む音が聞こえてくる。

ていうか、持ち上げたただけなのに大げさだな。

「今……あれ？」

計測を間違えたのか、今回も様子見だったのにあつという間に持ち上がりクレーンに

ぶら下がったまま……どこかで計測を誤ったのか？

そして、そのままストンと呆気なく、取り出し口の方へと落ちる。

「納得いかん、仕留めるのは次だった筈なのに」

「取れたんだから納得しろよ」

そう言いながらヌイグルミを掴み取る。

店員が何ともない！？とか驚いていたが、はて？どどういう意味なのだろうか。

《指紋認証を確認、獲得者を認識完了》

「は？」

ヌイグルミから妙な音声が発生した。

これって一体どういうことなの？と、友人達に目配せしたが、誰も事態を飲み込めていない。

ために幽霊で透過して中を探ってみたが、機械らしき部品など無い。

少なくとも音声を発する為にはそれなりに大きな機会の部品が入ってなければ

おかしいのだが。

《これより、セキュリティレベルを低下。以降変更は無しとします》

そう言っただけのままヌイグルミは沈黙した。

本当になんだったんだろう？

「……………記念に写メー。ブログに載せよかなー」

まあいいやと思いつつ、パシャリとシャッターを切ったのだが……………

「！？」

「どうした……………ってうお！？」

携帯の撮影成功画面には見事にヌイグルミだけ写っていないかった。

何ぞコレ、何ぞコレ？

もう一度撮影したのだが見事にヌイグルミの存在自体が欠落したかのように

写っていない状態だった。

「今まで画像版にあがらなかった理由ってコレか」

「はあ、じゃあオクで売るのが無理か……」

写真がないと信憑性がないしなー。

レアである事に違いないが、知り合いのヌイグルミを保持しているのも

なんだかなーという気持ちになる。

「そ、それなら私に譲りなさい!」

あ、さっきの女がこっちに詰め寄ってきやがった。

「ヌイグルミとはいえ、千冬様をそのような場所に出品するなんて外道のすることですわ!」

「いや、そうは言ってもいきなりタダで寄越せとは図々しくありませんか?」

そもそも画像ないのに出品できねーよ。

「うるさい、さっきの声色だとあなた男でしょう!男なら

女の言う事を聞くのが当たり前なのよ!」

駄目だこいつ、ここまで酷い思考の持ち主ははじめてみた。

唯一の救いとしては周りの女性達が逆にドン引きしている点だろう。

ここまで極端に貶めてくる奴が居ると思えないからなー、さすがに

全員が全員こんなだとは思っていない、思っていないんだが……うるさいコイツ。

……周りの女性達がこの女の行動を止めようとしなのは、剣幕に負けているからだと思いたい。

あんまり争いごとに発展させるのもどうせこっちが不利だろうし、狙ってた景品あるし諦めるか？

「それに警察に突き出せば変質者で逮捕されるわよ」

「服装は個人の自由だと思うのですが」

別に露出狂ほどのような極端な事をしているわけでもなし、ちゃんとトイレとかも男子用に入っているし。

犯罪行為は何一つとして行っていない。

とはいえ、この女が俺に女性の格好だと油断させてセクハラされましたと言われたら、

お縄頂戴状態だろうなあ。

「種もなし、仕掛け無しの手品……！！！」

「は？」

最終手段発動、まずは服の中から取り出す振りをして紙の中からでかい布を取り出していく。

手品っただけで誰も怖がらないのが不思議でしょうがない。どう考えても面積オーバーしていると気がつくはずなのに。

「この布を俺自身に被せます……！」

「あんた、一体何を——」

女がつかみかかろうとしてきた瞬間、布を上からかぶり、そのまま――。

「The World」

時間を停止させる。

風景自体の色合いが心なしに薄くなっている。

時間を停止させられるのには大分ムラがあるのだが、だいたい5秒は止めていられる。

その止まっている間には当然、俺の動きを誰も認識する事はできない。

一人だけ厄介なお方が居るのだが、あの人は例外だ、うん。

己の力だけで時を止めた空間に捻じ込んでくるって人間じゃないよね千冬さん。

「時は動きだすつと」

《して――消えてる！！？》

拍手の音が聞こえているのだが、全員ノリがいいな、おい。

「あ、店員さん。持ち帰り用の袋よろしく」

「え、あ、はい」

いきなり声をかけられて驚いている店員に多少心の中で苦笑しておく。

誰もいなかった筈なのにいつのまにか近寄られたら確かに驚くよな！。

「……弾、すまないが先に帰るわ、お前らも早めに逃げろよ」

『……そうさせて貰う、お前も気をつけて逃げろよ』

「了解」

そう言いながら、店の出口から出て、そのまま道を何度も何度も曲がりながら家に戻った。

『いつ帰ったんだ』

「開口一番にどうしたのよホキホキ」

帰宅後、適当に机の上に千冬のヌイグルミを鎮座させておいて、目当てのヌイグルミは暫く先でいいか、と思いつつソファのうえで横になっていると、ホキホキから連絡があったのだが、なぜか不機嫌だった。

「帰る前に、女子に絡まれて鬱陶しかったから逃げた」

『……一体何があった』

「ふむ、ヌイグルミの都市伝説って知ってるか？」

『ヌイグルミ？都市伝説？……………千冬さんのヌイグルミの事か？』

「そ。それを獲得したらやけに寄越せだの、男なら女の命令は絶対だのうるさかったから

逃げました……………あそこまで極端に男を見下す存在は初めてだ」

『……………ならば仕方がなかったのか、いや、私がもつと早く決めていれば……………』

「聞こえないけど、どしたのホキホキ」

『！な、なんでもない。ちょっとした考え事だ』

「愚痴とかならいつでも引き受けるけど？悩み事だったら聞くことしか出来ないけどな」

解決方法を提示するのは苦手だ。

それに、その人の人生を言葉で左右するって言うのがあまり好きではないので、

基本的に切羽詰った悩みで無いと聞く気はない。

気軽に言っただけで、それが因果で破滅に導く可能性は0ではないしね。

『いや、そういうわけではないから大丈夫だ』

「そうなのか？」

『そういえば、ま、前に剣道の事についてまだ有効だと聞かされたのだが……』

「モチのロンだけど……は！一生奴隷になれ宣言か！？」

『そんなわけあるか！！』

ですよねー、ホキホキなら絶対そういうこと言わないよねー。

「で、何々流石に何でもというのは困るけど」

『そ、そうだな……楔の写真メールを送ってくれ』

「へ？」

それだけなら、別に命令じゃなくても言ってくれば送るのに……いや、それだけじゃ無さそうね。

『出来れば男の格好で』

「制服とかしかないけど、それでいい？」

まあ、その部分なら命令じゃないと俺拒否しそうだなあ。

『……男物の私服ぐらい用意しておけ』

電話の向こう側で頂垂れているホキホキの姿が容易に想像できる。というか、やっぱりホキホキって、俺に気があるの？まだ確信は持てないから聞けないけど、それ以前にその事を聞くつて言うのが失礼だしねえ。

「ちょっと気合入れて、何か買ってくる。送るのは今日の夜か明日になるけどいい？」

『……あ、ああ』

さてさて、再び出かけるわけだが、女物の服しかないのよね。制服着て出かけるわけにも行かない事だし。

まあ、いつか……さて、どういう服を着れば多少格好よく映るかねえ。

「駄目ね、これじゃ女性が格好よく見えるっただけで男性が着たっただけにならないわ」

鏡の前で試着した服を眺めながら自分の今の格好を見る。

どんなに足掻いても、前をはだけるような格好の服を着ても、男性には見えないのだ。

かと言って、反則技で男に見せるわけにはいかないし、困ったものだ。

「うーん、やっぱりどこかで妥協するべきかしらねえ」

結局、頑張って男装しましたよ！的な写真を送るだけになったが、反応は概ね良好だった。

「次はもつと頑張つていい写真を送る事が出来るようにしないとね」

ちなみに、男性服は全て購入して箆笥の中に入っている。

「あら、一夏からだ、もしもし、どうしたんだ？」

『もしもし、お前男性服が恐ろしいぐらいに似合わないな』

「見たのかよ……今度の休みの時にはちよつと一緒に見繕つてくれ」

『分かった』

店員はあてにしてくれないし、男性からの意見を聞こうと思えば一夏が弾しかないんだよな。

他にも友人は居るのだが、どうにも男物を進めてくるような友人がいないのだ。

ゆえに二択しか存在しない。

「用件はそれだけか？」

『そうだな、明日はいよいよ決闘の当日だ。だから、最後の連絡になると思う』

「決闘までのをつける、まるで死に行くみたいじゃないか」

どれだけ死亡フラグを立てるんだ、立てるんなら女の子とのフラグだけに専念しろ。

……自分で思ったくせにかなり虚しい気分になった。

「んじゃあ、結果の報告は明日の放課後になるわけだ」

『まあな』

気を取り直して、結果を聞ける時間帯について聞いておく。
いつその事幽霊の中に遠距離まで物凄く遠距離まで移動できて知覚
できる

タイプのものであれば直接見る事が出来るのだが。

「万が一、手足がもげたり、腹に穴が開いてしまっても安心しろ。

死んでしまわない限りは確実に治しに向かうからな」

『そこまで酷い負傷はまず起こらないからな!?!』

まあ、実際の試合じゃないし、殺し合いでもないので、負傷したと
しても

軽いものが主だろうね。

「そろそろ、切るな。頑張れ親友」

『……ああ』

一夏の返事を聞いた後、電話を切る。

さて、俺も明日の授業に備えて寝るとしますか。

「ん?メール?」

携帯を開くと少し前に送られてきた奇妙なメールとアドレスが同じだった。

かなり気持ちが悪いのだが、妙な好奇心が働き、開いてしまう。

件名：なし 本文：おめでとぅ、次は藍越学園

何がおめでとぅなのか、よく分からないが今度は俺の通っている学園が書かれていた。

「本当に誰だよ……またメール……!？」

メールの内容を確認する為に、今日獲得したヌイグルミの置いてある部屋へ向かう。

電気をつけて部屋を覗くと、そこには……無表情だった筈の顔が微笑を浮かべている千冬の

ヌイグルミが同じ場所に鎮座していた。

件名：追伸 本文：あのヌイグルミは今笑ってる？

恐怖に近くなってしまった為、お前は誰だ、と簡易的に打ち込んでメールを送信するが、送信エラーだった。

その上にあて先は存在しませんときたものだ。

「……気にしても仕方ないな、うん」

背筋に妙な悪寒を感じつつ、俺は布団に飛び込んだ。

第二話（後書き）

ちなみにメールの送り主がバレバレな件。

イッタイダレデシヨウネ？

まあ、主人公の事を一夏や千冬のように見ていないけど、

両親よりかは認識が柔らかい状態です、多分。

では、また次回

主人公設定（前書き）

とりあえずの紹介。

主人公設定

名前・常城 楔（つねしろ みそぎ）

性別・男

年齢・15歳

身長・175・6cm

体重・73・4kg

趣味・女装、愚痴を聞く事

好きなもの&事・友人（特に一夏）、ヌイグルミ

嫌いなもの&事・際立って無し（強いて言うのであれば本当の両親）

血液型・A

誕生日・10月10日

髪・瞳共に黒の典型的日本人。

背中の肩の部分に星型の痣が存在しているのだが、産みの両親にはついていない。

細身の体系であり、服を着た状態だと間違いなく女性の性別に見える少年。

年齢の割りには身長が高いからそこで判別されそうなのだが、服装

などのせいで高身長的女性に見られるだけ。

女装癖であり、三歳の頃より実の親に着せられた影響でずっと女物の服を好んで着ている。

ただ、流石に冠婚葬（特に葬式）などのような公の行事などには男物の服を着るが、周囲からは

怪訝な目で見られてしまう。

尚、余談ではあるが一夏の初恋の相手でもある（入学式前に遠めで見られ）

が、翌日にいきなり男宣言して失恋させてしまうという結果に。

人間関係は一部を除き広く浅い。

異質な能力を持っているせいで実の親に捨てられ、叔母である今の母親に引き取られる。

現在は、一人暮らし。

特殊能力：幽霊さん（スタンドの事である）

自らの精神エネルギーが生み出すパワーのあるビジョン。

直接攻撃できるものや、異質な能力を生み出すものまで様々な能力を持った

幽霊を操るものであると、本人は認識している。

幽霊と呼んでいる大きな要因が、周りの誰もが誰も可視する事ができない事。

物理干渉が自分で調整できる点でかなり便利であり、幽霊を展開できるのは5種類まで。

ちなみに時間停止能力を使用しても本人は老化しない為、使いすぎで周りより老けるのが

早くなったりはしない、使い放題なのだが使ったびにチャージに必要な時間がドンドン増えてしまう為、

あまり多用できないのには変わりが無い。

後は、使う気が無いが危険な幽霊も多数備えている。

そして、本人に知る由は無いのだが、実は自然死以外だと非常に迷惑な存在である。

主にノトリアス・BIGのせいだ。

IS・・・現地点では操作できるかどうかは不明のため未所持。

第三話（前書き）

ようやく、他の視点に移動して。

でも本格的に絡むのはやっぱりまだまだ先。

第三話

今日は一夏の決闘当日。

当然平日かつ学園の生徒ではないので見に行く事など出来ない。

「生じゃ見れないのが困りモノ」

生で見に行こうにも知覚できる幽霊は射程距離を完全に外れている距離だし、
かといって自動操縦型の幽霊だと距離はクリアできるが、何が起きているのか
不明だし。

「困った事に授業中ですし」

既に念写によって両者の機体が決闘場に集まっているシーンだけは撮る事に成功したのだが。

……俺の能力、ばれたら面倒だなー色々な意味で。

「ワンセグ機能の携帯でも買って置けばよかった」

とはいえ、ないものは仕方がないのである。

そして言葉に出していったのだが、実際にはテレビを介してやらなければ

盗映は不可能だ。

願わくば、家に帰る前に試合が決しない事を祈る他無い。

……いくらなんでも一夏が瞬殺される事ってないよね、無いよね？

「いつその事、決闘らしく演出してあげようか」

そう言つて、一体の幽霊を動かし、IS学園へと方向を向ける。

「【Weather Report】」

天候を操作しておいた。

流石に雨だけは自重しよう。

side: IS学園・一夏

「よくぞ逃げずに参りましたわね」

「当然だろ」

昨日しっかりと睡眠をとったから体調はばっちり、特訓もしっかり
行い、

いよいよ決戦だ。

楔や千冬姉、箒に激励を貰ったから簡単には負けられない。

にしても、目の前の機体は随分と鮮やかな青色だ……確かブルー・
ティアーズと言ってたな。

どこか王国の騎士を連想させるフォルムだ。
もっとも腰に手を当てている格好のせいで少し台無しだが。

「最後のチャンスをあげますわ」

余裕満々なのか、銃をむけていない状態で、指差してきた。

既に試合開始の鐘は鳴らされているし、直径200メートルのこのアリーナでは、

発射から被弾までの時間が0.4秒。

こんなもの、生身で避けれるの千冬姉と楔（幽霊使用時）だけだぞ。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理ですわ。ですからボロボロになる前に

今ここで謝罪するのであれば許して差し上げますわ」

こころなしか、先ほどまで快晴だった青空が曇ってきた気がする。
俺の怒りに同調したのか、それとも俺の今の心境がそう見せているだけなのか。

あれ？今日って確か一日中晴天の筈ですよ

天気予報は当てにならないって事だな

「あら、曇り空ですわ」

……どうやら完全に曇っていただけのようだ。
しかも……

雷なってますね

……”どっち”だろうな

……どっちも可能でしょうね

こんな無茶なことを出来るのは、やってもおかしくない束さんが、
天気を操る幽霊を

所持してる楔しかないだろう。

……多分、楔なのだろうけど一体何やってるんだ。

「そういうのはチャンスとは言わないな……それにこんな決闘に
相応しい

シチュエーションになったって言うのに引き下がれないだろ」

「そう、ざんねんですわ」

——警告！敵ISが射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー
ギ―装填確認。

ISから伝わってくる情報をしっかりと把握する。

「お別れですわ」

瞬間、俺は体を横にずらして初弾をやり過す。
キューイン、と独特な音と共に閃光がはしり、俺が先ほどまで居た地

点に

エネルギーが着弾する。

当たったらどれだけエネルギーが削られていただろう。

ISバトルでは勝敗を分けるのにエネルギー残量を0にするというルールが存在する。

エネルギー消耗は基本的に攻撃や、動作、攻撃を受けるなどの行為によって発生する。

基本的に攻撃はシールドが受けるが、シールドを貫通し、実体にダメージがいく場合には

絶対防御が発生して安全が保障される代わりに多大なエネルギーを消耗する事となる。

「あら、様子見とはいえよくかわせましたわね。特訓が生きたようですね」

「……見てたのか？」

「いいえ、特訓風景は覗いておりませんわ」

そう言いながら、言葉は無用と言わんばかりに次弾装填を開始し始める。

一撃目は様子見と言ってたから、しっかりと見極めながら隙をつく。さきほど降伏勧告した時に攻撃してもよかったのだが、それでは勝った気にはならないし、

それは相手も同じだろう。

自分の持つ武装・近接特化ブレード【雪片式型】を確認しつつ攻撃を回避する為に
気を引き締める。

「さあ、踊りなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・

ティアーズの奏でる円舞曲で!!」

「距離、二十七メートル……少し遠いか」

フィン状の兵器を見ながら、おそらくレーザー射出攻撃だと予測する。

まともにやっつては勝ち目が無いのでここは落ち着いて、見にまわる。

「なんてな!!」

「え……」

もともと、勝ち目は大分低い上にこちらの装備は完全に近接上等の装備だ。

見に戻って逃げているのは決して勝てない。

それならば相手の間合いで戦わせなければいい。

相手が油断しているからこそ実行できる策、後は機体性能の差なのだが……

「速い!!」

「逃がさない!!」

少なくとも速度においてはこの白式はブルー・ティアーズを凌駕している。

時折、ビットから攻撃が飛んでくるのだが、こちらの脚を止める事を優先しようとしているのか、やや攻撃が荒く、十分に対処可能な範囲だ。

「いくぞ!!」

「甘いすわよ!!」

完全に近距離に捉えた。

と思ったら、セシリアの機体の方からさらにビットが射出されて、レーザーを放ってくる、が。

「どっちが!!」

「なあ!!?」

そのレーザーをぶった切る!!!

その勢いのまま、【雪片式型】をブルー・ティアーズに叩きつける!!

たったそれだけで勝敗は決した。

side: IIS 学園・一夏 e n d

「勝った事を後悔するなんて贅沢じゃないか?」

『いや、クラス委員長になる為の勝負だという事をすっかり忘れてた』

イギリス代表との決闘から一夜明け（多分疲れてるだろうから）、放課後に戦果を聞いてみると、あっさりと勝つたらしいのだが、理由が相手が油断しきっていたというものだったらしい。

おい、しっかりしろよイギリス代表候補と思ったのだが、まったく訓練を積んでないのが

一週間努力してもそれほど変わらないと思っていたようだった。

確かに凡人だったらそうかもしれないが、特訓の教師役が千冬さんだしなあ。

初撃をかわしたらあつという間に間合いを詰めて勝負を決したようだった。

「どうせ辞退出来ないんだろ？」

『そうなる、千冬姉が厳しいからな』

辞退しようと思ったら、即却下されたらしい。

『おまけに急にセシリアが抱きついてくるし』

しっかりとフラグを建設しやがったコイツ。

そのくせ死亡フラグを押し折るってどういうことなのだ。

「どう考えても一夏に惚れてるよねその娘」

『いや、それは無いだろ、ただ単に俺の実力を評価しただけだと思っけど』

もうやだこの愚鈍親友。

抱きついてきた地点でそれ以上の感情があるのは明白だろうに。

『後は、セシリアがISの教師役を買って出てくれたんだけど』

「ん？千冬さんは？」

『特訓の時限定だって言われた』

まあ、確かにずっと一人の生徒だけを贖済するのも世間的に駄目だろうからな。

なら少なくともかなりの訓練を積んでいる相手が先生役ならかなりいいだろう。

「代表候補生が訓練相手なら願ったり敵ったりじゃないか」

『でも、レンジが違っただよなあ』

一夏の機体は近距離専門、オルコットに関しては、中距離型らしい。おまけに射撃主体と剣主体という違いもある。

考えようによっては、中距離相手に対する戦略を積む訓練にもなるから

そう悲観的な事じゃないと思うのだが。

「で、どうしたの」

『結局、箒に剣術を教えてもらって、セシリアには遠距離相手に対する

模擬戦相手になってもらった。

箒がなんだか、セシリアと俺を見比べて溜め息をついてたけど』

その際に箒に対してオルコットが睨みつけていたらしい。
オルコットの判断はかなり間違ってると思うのだけれども。
俺の予測が正しければ、なのだが。

「で、他にも何かありそだね一夏」

『う……わかるか?』

「わからいでか」

伊達に一番多く年月を過ごしているわけではないのだ。
下手したら千冬さんよりも一夏と交流していたと断言しても良い。
でもその事を千冬さんに言ったら間違いなく逝ってしまう。

『実は、試合が終わった後、他の男子の反応が思いっきり変化したんだよ』

「何だ、余計に敵意を見せてきたのか?」

『見られてるだけで胃の辺りがキリキリ痛んで一瞬倒れそうになった』

……本当に訳が分からない。

もしかしたらオルコットに好意を抱いていて、同じクラスだという理由で

勝手に恨んでいて、抱きついたと言う噂を聞いて余計に敵意を増したと言う事なのか?

そいつらに会ったら間違いなく幽霊の拳を叩きいれてやると心に誓った。

いつその事爆弾にするべきか、いや亜空間にばら撒くか。

『今かなり物騒な事考えただろ』

「滅相もございません」

なんで考えてる事を認識できるんだ。

……あの事件みたいな事がばれたらチョイ厄介かなあー。

ただでさえ心労が溜まっていて一夏にこれ以上余計な心労を重ねるわけにも

いけないし、千冬さんも同じ。

「仕方がないから明日八つ当たり気味に天気を雪に変えてやる」

『……季節感を守れ！！しかも昨日天気を変化させたのお前だろ』

何故わかった。

普通に天気が変化しただけだと考えるのが妥当なのに。

「雷出せるわけ無いだろ」

『天気を変化としか聞いてないんだが』

しまった、ついぼろが出てしまったぞ。

『そうか、あの雷の演出もお前の仕業か』

「——千冬さん？」

急に声が変わったと思ったら、千冬さんだった。

『あの曇り空のせいで洗濯物が乾かなくなったと言ってる先生や生徒が多数居る。』

明日埋め合わせに快晴にしておけ』

明日のその地域は確か今日と同じく大雨ですよね。
まあ、俺のせいだしやるしかないか……

「つて出かけてたら洗濯物干せませんよね!？」

『問題ない、明日必ず晴れると断言しておいたからな』

……… 自業自得だけど重労働だ。

天候を変えるんじゃないかなかった、はあ。

「分かりました、晴れにしておきます」

『そうか、では織斑に戻すぞ』

いや、あんたも織斑でしょうが……公じゃないんだから弟が一夏でいいのに。

一夏に戻ったのを確認して。

「じゃあ、今週の休みにはお前が行く筈だった藍越学園を外だけ案内してその後で

ゲームセンター巡りだ」

『遠まわしな嫌がらせか!?!』

うん、半分ぐらいは。

せっかく一緒に行こうぜって言ったのに、道を間違えてIS学園に向かっちゃったんだから。

付きっ切りで勉強を教えた身としちゃちょっとムカつくんですよその辺りだけ。

「んじゃ、駅前まで迎えに行くから遅刻せずに来いよー」

『あ、ああ』

「また日曜日」

そう言って電話を切る。

………ついでに一夏に預けようかな、あのヌイグルミ。

そう思い立って、俺はヌイグルミのある部屋へと向かって行った。

「あつたあつた………また表情変わってる」

また再び無表情になっていた。

実は生命が宿ってるんじゃないかと疑って幽霊で探ってみたが、その反応は一切無かった。

機械の反応も電気系統の幽霊で試しても反応が無かったし、本当に何なんだろうか。

「気にしても仕方が無いとは分かってるんだが、気になるな」

いつその事、原材料にまで直せば何か分かるかもしれないが、肉眼で見えない部品だったら
見えるようにしたとしても解析できないし、専門家でもないのかわ

からないだろう。

「さて、今日も鏡の中で寝るか」

流石に鏡の中に侵入できる奴など存在しないだろう。

このヌイグルミがウチに来てからなんだか監視されてるような感覚があるので

この世界から一旦、姿を消しておく。

「鏡の世界へ、【M a n i n t h e m i r r o r】」

そうして、鏡の中へと進入していく。

左右反転した世界、だが、これでもまだ安心できないので、毛布を上方に投げて、別の幽霊を出す。

「少しの間さようならこの世界よ。【D i r t y D e e d s
D o n e D i r t C h e a p】」

無限に存在する平行世界へと逃げた。

これでようやく監視されている感覚がなくなる。

ちなみに余談だが、名前を一言言っているのは、幽霊から名前の情報

流れ込んでくるからだ。

そして、幽霊の中で一番初めに使った能力が【T h e W o r l d】である。

三歳の頃、親から英語を習ってる時に使った何気ない一言で出てきたのである。

「英語を習ってなかったら……いやいや、中学の時に出てくるよ

な、うん」

【The World】という単語なんて結構な頻度で使ってたしまうし。

遅かれ早かれ出現していただろう。

むしろ早い段階で出せて人には見えないという認識がもてただけでも行幸なのだから。

最初の頃は子供の戯言だと思われてたんだよなー。

そして、誰にも見えない事をいいことに悪戯しまくったっけ。

さすがに万引きとかはしてないけど、うん。

「【Enigma】」

紙に収納していた布団を出して寝る準備を整える。

「あ、今更だけど【Enigma】で収納すれば安心できるんだったんじゃ」

ヌイグルミを収納すれば何とかできそうなものだが。

……いや、監視自体がヌイグルミ以外から発生しているから無理か。そう思い、明日も早いので左右対称の目覚まし時計をセッティングしつつ、眠りについた。

side:?????

「あれー？反応が完全になっちゃった」

画面をいくつも切り替えて搜索するが、まったくといって姿が捉えられなくなった。

こんな事はないのになー。

「もしかして、また鏡の中かな？」

あれって結構便利だよー。

入り込めるの、私とあの子しかないし……まあ、最初に入り込んでいるのはあの子なんだけど。

それをチョチョイと解析して私も鏡の世界に入り込めるように機械に力を持って可能となった。

お陰で逃亡生活にも多少余裕が持てるようになったなー。

いざとなれば鏡の世界に逃げ込めば万事解決！

「おやおやー居ないねー……また別の手段で隠れたのかなー」

DNA情報を解析して行方を追っているんだけど、この場所が一番近くて、少し離れるたびにドンドン反応が遠くなっていた。

「うむむ、私の追跡から逃れれると思うなよー」

とは言っても、流石にこういう手段で隠れているのかわからない……

…正確にはいくつかパターンを
予測できてるけど、その解析がちょっと面倒くさそうだなー。

「ちよつとした悪戯がこのような事を招くなんてねー」

最初、楔っていう子の事は、まあ、両親と同じくらいの扱いにはしていた。

箒ちゃんが好きな相手だし、いつくんの親友だし、少しは認識しないと駄目かなーって程度で。

でも、又イグルミの時に起きた現象で俄然興味がわいてきた。

超能力だよ超能力、オカルトだよオカルト、こういう仕組みなのか気になるよ。

まあ、流石に解剖とかするのはバレたら箒ちゃんに絶縁されそうだからしないけど。

「異世界移動？亜空間移動？体を縮小？……どれも滑稽だけど実現させているとしたら、

みんなみんな凄い事だねー。うふふふ」

体を原子以下にまで分裂させているという可能性も否定できないし、実は変身して別の物体に

変化していると言われても驚かなくなってきた。

とはいえ、見たほうが早そうなので、あらかじめ鏡の中に待機させていた機械の映像を再生させておく。

「ふんふん、ここの地点ではまだ、居るんだね」

その後で紙のような物から毛布を取り出していた。

「ほうほう、そういえば毛布が置いてあったね」

再生させている機械とは別の機械で毛布を覗き込む。
反応が一番近い……もしや毛布に変身したのかな？
だとしたら凄いね、それなら反応が薄くなったとしてもおかしくは無い。

『少しの間さようならこの世界よ。【Dirty Deeds
Done Dirt Cheap】』

「ん？」

その映像で布を被った瞬間、姿が消え去った。

ちーちゃんのヌイグルミを確保した時も、同じような方法で
消え去っていたけど、また瞬間移動でもしたのかな？

「『天国と地獄』？それとも直訳の『いともたやすくおこなわれる
えげつない行為』？」

名前だけじゃわからないな……。毛布を調べてみようかなー」

今のところ判明してるのは、瞬間移動としておいてる【The World】と

少なくとも天気を操った【Weather Report】、そして鏡の世界に入り込む

【Man in the mirror】……後半二つは名前どころ
りだけど、

【The World】に関しては名前の割りにパツとしない能力
だから何か別の可能性があるだろうし、

でもでも【Dirty Deeds Done Dirt Cheap】

a p】……ん？

「少しの間さようならこの世界よ……別世界かへの移動、か……
流石に私でも

それやるの厳しそうだな」

あくまでも厳しいだけで、実現させてみるけどね。

「よし、この能力に関して解析しておこう」

篝ちゃんの誕生日に間に合わせて見せるからね！。
あ、その時にいっくんのものにも搭載しておこうと。

s i d e : ? ? ? ? ?
e n d

第三話（後書き）

????の正体は絶対バレバレ。

主人公に対する認識は実の両親よりマシな程度です。

話しかけたら、返事を短く区切るくらいには。

ではまた次回！。

第四話（前書き）

SBRが終わってしまった。

——ちなみにこの作品では七部までのスタンドしか

出す予定は無いです。

流石に八部を含めようとすると、新しいスタンドのほうか

便利じゃね？とか有り得そうなので。

第四話

「男装の令嬢にしか見えないな」

「開口一番それか、別に気にしないが」

どうでもいい事なのだが、監視が昨日を境に無くなったらしい。幽霊さんたちもその辺り敏感なので探らせておいたので、その報告を聞いた結果なのだが。

それでも一応寝るときには、警戒だけは怠っていないが。

具体的には自我がある幽霊を三体配置していざとなったら、

【Dirty Deeds Done Dirt Cheap】を発動させるように

言っている。

寝返りをうつように消失し、平行世界を移動し続ければ良いだけ。

いざ、戻る時も戻りは簡単だ。

……基本となるこの世界にしか”IS”という技術が存在していないので、

ISが存在する世界へと戻ればいい。

……ちなみにISの代わりの技術が単なる巨大ロボットだったり、パワーを上昇させる

スーツだったりとISに劣る技術だけになっていた……いずれも

女性だけが扱えて、平行世界の一夏は

扱う事が出来なかったりする。

「ところで、それが待機状態の【IS】か？ブレスレッド状の奴」

「そうだ」

ほうほう、待機状態の奴は随分と小さくなるんだな。

質量とか無視してるな、オイ。

とか思ってたら、なんか睨まれた……………うん、【Enigma】の方がおかしかったね。

実際、今ロードローラー収納してるし。

「はあ……………なんか俺への視線が集中してるんだが」

いいじゃないか有名人、男子から嫉妬の視線を集めるぐらい、むしろ女子の視線しか

浴びてないんだからちょうど中和されるだろう？

あ、そういえば他にも数人居たんだっけか？

それはともかくとして、俺の通っている学び舎の正門へと案内する。

「外から見ても普通の学園だな」

「ま、そりゃそうでしょ……………極々平凡の学園だし、下見の時と変わらなかったし」

「ちなみに部活は？」

「帰宅部のエースですが何か？」

一夏の家の清掃とか色々任されているんだし、部活なんてしてられない。

強いて言うならバイトの方に比重を置いてあるだけなのだが。

やろうと思えば運動部とかでエースになれるだろうけど、ある意味では

反則だからやらない。

「またバイト漬けか、成績とか大丈夫なのか？」

「ま、授業内容丸々コピーしたノートがあるから余裕ですけどね」

中学の頃、先生がどこまで進みましたっけ？と聞かれたときに、一字一句間違える事無く書かれたノートを差し出したときには非常に驚かれてしまった。

それ以来、中学の間は担当の先生は運動の体育以外では俺に聞くようにしていた。

内申がかなりの高評価でした。

でも、面倒くさいので学園入学時にはそういう事を自重しておいた。……友人連中にはコピーを渡してあるけど、ジューズ一本とか普通なら割に合わないけどね。

「さあ、ゲーセン巡りでストレス発散の旅に出ようじゃないか！

デート計画（笑）も十分立ててきたぞ。勿論昼飯は俺の奢りだ
！！」

「精密な動きが必要なゲーム禁止な」

えー？まあいいけどさあ。

弾幕ゲームノーミスノーコンテ倒す必要があるの以外ノーショットプレイしようぜー。

「幽霊使う気満々だろうが」

うん、みてて楽しいじゃん、そういう精密な動作してるのをみるのは。

俺が使ってるように見せかけるけどね。

「にしても今更だが弾とか太郎とか大地とか用事入っちゃって来れなかったみたいけど、

俺だけでよかったのか？」

ちなみに男の服装をしているので今日の俺は男口調を基本としております。

少しでも男と交流している感じを味あわせてやらなければ。

「俺の方も箒を誘おうと思ったんだが、剣道で他校との合同稽古があるらしくて来れなかったみたいだ」

「……ま、中学全国一になったんだし当然だろうね」

映像や写真を介してではなく、生で直接ホキホキを見たかったんだが、それはしばらくお預けか。

消息がわからない状態から居場所だけ判明してる状態になったから前よりマシっちゃマシだけど。

「さて、ゲーセン巡りに行くぞ！！まずは目の前のゲーセンからだ！！」

「何で学園の目の前にゲームセンターがあるんだよ」

「別にいいじゃない、昼休みに利用する学生や先生が結構居るぞ？」

「先生もかよ！？」

バリバリ体育会系の教員が、美少女クイズのゲームのランキングをすべて埋めてた時には、自分の目を疑ったよ。

「行事の中にゲームセンターでの格闘ゲーム大会もあるし」

「……………どうして俺は試験会場を間違えたんだ……………!!」

入学前には知らされない行事だから仕方が無いと思うけどね。一夏を慰めつつ、ゲームセンターの中に入っていった。

黒服の姿がチラホラ見受けられたけど、一夏のSPなのだろうか。

「……………このパターン、何らかの悪意を感じるぞ」

「どうしたんだ楔……………俺のヌイグルミ？」

クレインゲームを覗き込んだら、一夏のヌイグルミが置いてあった。……………いやいやいや、いくら一夏が世界で四人しかいないISの乗り手でも

ヌイグルミが出るほどのものじゃないだろ。

少し気になって携帯電話を開いて。チャンネルの掲示板を覗き込むが、

千冬さんのヌイグルミ情報は俺が取得してから数日で話題に上らなくなり、

今度は一夏のヌイグルミについての情報が書き込まれていた。
何故だか、書き込んでいるのが一人の人間によるもののような気がする。

「どうする？要るのなら取得するけど」

「…………自分のヌイグルミを所持するのって変だろ、お前が持てよ」

ヌイグルミを持つとか、その対象が好きだといってるようなものじゃないか。

いやいやいや、一応俺、ノーマルですよ？

ちゃんと女性が好きですよ？まあ、ときめくようなタイプの女性とは縁が無かったけど。

…………俺って初恋無いのよね、なんか寂しい。

「初恋相手が男よりマシだ」

「心を読むな、そして自分で言ってる落ち込むな。コレやるから」

そう言って一枚の紙を一夏に手渡す。

…………中身は適当なコミックの詰め合わせ。

一般少年漫画が主だし、ホキホキも読もうと思えば読める類のものだ。

「ま、ちゃちゃっと取得だけしておくか」

そう言って五百円を入れて3ゲーム挑戦を開始する。

当然、取る気満々なのだから【Star Platinum】を出してクレインゲーム

開始する、ちなみにこの店には俺のクレーンゲームの取得率のせいでマークされており、微妙な暗黙の了解で一日一回の来店につき、三つ以内までとなっている。

ちなみに俺があっさり取る光景を見た他のお客さんが結構な額を捨てていくので、店に大分貢献しているのは別の話。

「あの時と同じパターンを試してっと……………」

0.001フレームほどの精度で調整を行い、獲得に向けてボタンを押し込む。
結果は一発取得成功といったところだ。

「……………妙な音声は無し……………」【Enigma】「

死角で【Enigma】で収納し、手に何も持っていない状態にしておく。

前回と違って傍にいる本人そっくりのヌイグルミだから店員に袋を貰うわけにもいかない。

キチンと獲得したし、窃盗にはならない筈。

「後二つは適当に獲得するか」

とりあえず兎と狼のヌイグルミを取得しておく。

一発で取得して、ササッとそこから離れると……………お客さんがかなり殺到していた。

取りやすいクレーンゲームと誤認した客かつ、初来店の客なのだろう。

「生贄十人確保」

「ひでえ」

初見じゃない客が哀れそうに釣られた客を見ていた。

全員、俺のプレイを見た後で取りやすいと誤認してかなりの額を振り込んだ客たちである。

「とりあえずクイズ式格闘ゲームでもしようぜ」

「どんなゲームだよそれ」

クイズに答えながら格闘するゲームである。

正答率によって攻撃力とか防御力とか、技を扱う為のゲージの量とかが変化する。

一人でプレイするのは難しく、二人以上を推奨しているゲームである。

正直、誰が得するか意味不明なゲームです。

「……………」

「どうしたんだ一夏、冷めるぞ?」

「いやいやいや、昼食にわざわざ予約取るなよ!!どれぐらい前

に予約してたんだよ!!」

一夏が小声ながらも叫ぶと言う器用な真似をしていた。
今、俺たちが昼食を取っているのは、裕福な人物が客層であるレス
トランで食事をしていた。

「義母が義父とのデートを仕事の都合でドタキャンされて、せつ
かくだから行けと言われただけ」

「……お前とおばさんが行くという選択肢は無かったのか?」

「義親子で行っても面白くも何ともないでしょう!彼女でも誘い
なさいって言われた」

そもそも女装趣味の変態に彼女が出来るなんざ有り得ないだろ、と
心の中で思ってみる。

一応、気になる相手は居るには居るのだが、滅多に会えるもんじや
ないしな。

「俺はお前の彼女じゃないぞ」

「知ってる、でも特に対象がいなかったし、飯代浮くから誘った
OK?」

「……まあ、いいけどな」

そう言つて、運ばれてきた前菜を食べ始める一夏。
イタリアン料理フルコース。

「モッツアレラチーズとトマトのサラダ………そっぴや最近肩

こりが」

「食事中に何する気だお前は」

食事に混入できる幽霊を出そうとしたら一夏にとつかれた。確かに他にも客がいるんだからやったら食欲がうせるよね、アレは肩が挟れるほどの量のアレだもんな。

「ていうかさすが双子といったところか……今の一撃、千冬さんそっくりだったぜ」

「え……………そうか」

（そこで嬉しそうにするなシスコン）

呆れつつもトマトとチーズと一緒にして口に運び込んだ。

本当に肩こりを何とかしたいんだけどね……………帰ったら自分で作ろうか。

ゴミ箱を近くに用意しないといけないが。

「そーいや、止めたんだがその幽霊、味も変化させられるのか？」

「……………多少おいしくはなるだろうが、結局は作り手に依存される。まあ、

俺自身が作って混入させたら結果は違っただろうがな」

とはいえ、当然ながら本職の人には遠く及ばない……………まあ、別に料理人を目指すわけじゃないし、別に料理がうまくなくてもいいだろう。

体の不調を治すには最適だし、身内向けオンリーならそこまで味はきにしくてもいいし。

「お次はピッツアか……ボルチーニ茸ののったマルゲリータ」

「タバスコかけすぎだろ」

最後のデザートはプリンだった。

甘くておいしかったけど、何でバケツプリンだったんだろうか。おかげで食べきれずにほとんど残してしまった。

「で、楽しめたかー夏」

「気晴らしにはなった……」

駅までというのもアレだったので、普通に学園まで送っておいた。
【IS】とかで来られたらどうしようもないが、生身や狙撃、乗用車などが

相手であれば俺でも十分に対処できるから護衛役のようなものだ。無論、そういうのは黙っているのだが。

「じゃ、私はこの辺りでおいとまさせていただきますね」

「急に言葉遣いと声色を変えるなよ」

「これは失礼いたしました、じゃ、面倒事を避けたいから特殊な帰り方をする」

そう言つて一夏に小さな手鏡を押し付ける。

俺の意図が分かったのか、俺に向けて手鏡を見せる一夏。

誰も通っていないのと、人気の無いのを【Echoes・act：2】

で観察し――

「じゃ、またな一夏……【Man in the Mirror】」

鏡の世界へと突入した。

十数秒間誰にも見られないというのは既に【Epitaph】で確認済みである。

「さつてと、逆方向に辿っていかなきゃな」

人間が一切居ない世界にて、まっすぐ直進して家まで帰る。

まず、紙を広げて中に収納していたバイクを取り出す。

そのバイクに【Wheel of Fortune】を憑依させてモンスターバイクに変化させておく。

「障害物無しの超スピード走行開始!!」

時速200キロ以上のスピードで走行する。

現実世界での一般道では普通にスピード違反なのだが、鏡の世界ではまったく関係無い。

ちなみに普通は生身の状態だと体の負担的にアレなのだが、【Wheel of Fortune】による補正で多少緩和しているし、訓練を積んでいるので影響は無い。

「家まで後、何キロあるかなー」

鏡の世界にて念写を行い鏡の世界での地図を幽霊の一体に広げさせておく。

「後どのくらいだ、【White Snake】」

「まだまだ先だ、ところで先ほどのはいいのかね？」

【Whitesnake】が地図を広げながら俺に質問してくる。
大方、俺が密かに一夏にたいして行った細工に関してのことだろう。

「何の事？」

「とぼけるなよ、まあ本体が自分の意志でしたのなら何も言わないさ」

「なら最初から言わないで頂戴、結局一方通行なものだからあの幽霊は……少なくとも一夏には害は無いわ」

「君には害があるだろう……まあそれはさておき、本来は幽霊ではないのだがね」

また、それかと呟く。

自我のある幽霊たちがよく言うのだ。

幽霊で表しては幽霊たちに失礼だと……本物の幽霊に遭遇した事無いので、

別に幽霊でいいと思うのだが。

「なら正式な通称を早く思い出さないよ、【White Snake】」

「……………ところで二人乗りは罪ではないのか？」

「警察とかが見てないからセーフよ」

第一、それ以前の問題としてスピード違反だ。

というよりもバイクで200キロという速度で疾走してるのがおかしいんだけどね。

「それに精密走行は【Star Platinum】のお陰で問題ないし」

そもそも障害となるようなものが無い鏡の世界では気にする必要が無い。

まあ、表の世界にて建物とかが崩れたりしたら、こっちにも同じような現象が発生するけど、

上から落ちてきて挟み込まれる分には逃げれるから問題が無い。

「そういや、射程距離は無事だっけ」

「白々しいぞ【Love Deluxe】で一夏の髪の毛に自らの髪の毛を潜伏させておいたくせに」

そのお陰で展開できる幽霊自身が二種類ほど減ってしまった。

射程距離が髪の毛に依存させてある【Love Deluxe】とそれで射程距離を誤魔化して

一夏に潜伏させてあるアレ。

そして【White Snake】に【Wheel of Fortune】と運転の【Star Platinum】。

鏡に潜り込む【Man in the Mirror】は使う時だけ出せばいいので今は関係なし。

「家に帰ったら本当に肩こり治す為にチーズとトマトのサラダを作るわ」

「言い方を少し変えれば死亡フラグだな」

うるさい、白蛇野郎。

あ、そういえば本日は特に一夏の愚痴を聞いてないや。

第四話（後書き）

中々執筆が進まず、頭を悩ませています。

どうでしょうか。

次回もかなり遅れるかと思われます。

第五話（前書き）

どうしてこうなった……三巻以降まで関わらせる気は無かったのに。

まあ、いいや主人公がISに関わるのが三巻以降だということにしよう。

うん、それなら嘘を言っていないから。

このぼやきの理由は本編にて。

第五話

親友とともに誘拐犯に捕まり、親友の姉を脅す愚か者ども。しかも、俺自身に銃を向けて引き金を引く寸前だった。

「私の名前は、常城楔」

「楔、どうしたんだよ」

「どうしたんだい、お嬢ちゃん自己紹介なんざ要らないんだよ。」

人質はそのガキ一人だけでじゅうぶ……」

「今、この場に居るもので私の名前を知る事が出来るのは一夏だけとなる」

そう言つて【Killer Queen】の幽霊を出し、一夏に触れる。

肩に見えない手が置かれている感触に驚いていたが、今はそのような事は関係が無い。

「Bite the dust」

その場の光景そのものが爆発し、時間を一時間巻き戻した。

その後、同じように誘拐され、同じような行動を取る。

一夏にも危険が及ばないし、俺自身にも死が訪れる事は無い。

それは一度経験しているから分かるのだ。

そうして、丁度一時間たつ頃。

「後、数秒」

「は、てめーが死ぬ時刻の事か？」

そうして、引き金に手をかけた地点で【White Snake】であらかじめ仕掛けておいた

一夏の視覚と聴覚を奪う時間が来て――。

この場に居た誘拐犯全員が吹き飛んだ光景を冷めた目で見つめていた。

そして、その光景を見終えた後で【Bite the dust】を解除し、ディスクを抜き取り、

一夏の視覚と聴覚を戻しておいた。

「という夢を見たのだけど【White Snake】、そういう幽霊あったかしら？」

「無いとは言わないが、君には扱えないさ……どうやらこの世界には矢は愚かウイルスが無いからな」

ウイルス？と尋ねてみたのだが、何でも無いと言われた。

まあ、あっても困るけど、と溜め息を吐いて、適当に携帯電話を開いてメールをチェックする。

「……………」

「ドウカシマシタカ」

「携帯を覗き込んで……また例のメールとやらか」

幽霊二体が何か言っているのだが、気にならない。

アドレスが表示されていないメールの内容はこうだ。

《ラスト：ちーちゃんといっくんの家の近く》

また場所だけの表示………というか、ちーちゃんといっくんって誰だよ。

ペットなのか？渾名なのか？

どちらにせよ聞いた事も無い渾名だぞ。

「【White Snake】、一夏のヌイグルミに変化はある？」

「昨日と同じだ、千冬のヌイグルミと違い、表情自体がもともと人当たりがいいから

何の変化も無い」

千冬さんに聞かれたらまず間違いなくボコボコにされる会話だ。
でも実際事実だし。

「とにかくにも………先生から雑用を承ってるから学園に向かうとしますか」

念のため、紙にしてあるものを確認しておく。

いざという時に非常に役に立つものがあるからだ。

「【White Snake】【Spice girl】。私が見えない範囲の見張りを頼むわね」

「二体でいいのか？」

「ア、ソウイエバー夏サン二体使用シテルンデシタネ」

いざという時に逃げるのに使用する幽霊の為に、一体分の余裕は持たせておきたい。

一夏に使ってる幽霊を消せばいいのだが、一夏を敵視している男子が何らかのアクションを

起こさないという保証は無いし、自分自身の保護は普通は二体いれば十分なので我慢我慢。

（一夏優先とか、何考えてんだろうな俺。そもそも俺がやられたら一夏に使ってる二体の

幽霊も消えるってのに）

そう考えつつも、家全体の窓などの確認を終えて、俺は学園へと向かった。

一般人には決して見る事の出来ないSPを二体引き連れて。

「そういえば、メールの場所にゲームセンターがあつたのよね。偶然なのかしら」

「この近くにも一店舗存在するがな」

「帰り二寄ッテミマスカ？」

「……………好奇心は猫をも殺すというけど、ここまで突っ込んだじゃうと逆に突っ込みたくなるわね」

どちらにせよ、帰りまでは保留にしておくしかないのだが。

……………あれ？千冬さんと一夏ってもしかして”ちーちゃん”と”いっくん”なのか？

まあ、そうだとしてもそういう風に呼ぶ知り合いはいないんだが。

side:一夏

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらつ。織斑、オルコット。」

「試しに飛んでみせろ」

昨日の楔との気晴らしから一夜明けて、ただいまIS実習の最中だ。鬼教官の千冬姉は本日も通常営業だ。

なお、特訓の賜物なのか、展開するのに必要な時間は0・61秒…

……

光の粒子が俺の体からあふれ出てきて、再集結しISの本体が出現する。

そういえば楔の幽霊は0秒展開可能なのが二体ほど居るんだよな能力使用によるものだし、

他の人には見えないんだけども。

「よし、展開できたな飛べ」

言われてからの行動は早かった。

特訓の時にはすぐさま行動しないと、千冬姉の出席簿攻撃が飛んできた。

時間を止められたかのような速さでシールド貫通して実体にダメージを与えるような一撃を

与えるなんて、もはや姉が人間じゃなくて。イヤ人と言われても驚かない。

誰だISにはISじゃないと勝てないといった奴は。

ちなみに俺の機体の方がスペックは上なので、簡単にセシリアを突き放せた。

そうして数秒ほど飛び、地上から約200mの地点まで到達する。

「……………相変わらず凄いなこの光景は」

その地点に居るのに、はるか下に居る筈や千冬姉のまっげまで正確に見入る事が出来る。

……楔の幽霊の一体である【Star Platinum】とどっちが優秀なのだろうか。

双眼鏡駆使してキロ単位の距離を見る事が出来、顕微鏡を扱えば現代では発見出来ない微生物まで

発見するほどの能力を持っているのだが。

何とはなしに、藍越学園のあるだろう方角を見る。

……運動場が見えるちょうど授業の時間が重なっているのか体操着の生徒が多数居る。

見えるとは思わなかった、まあ色々障害物があるせいで見える範囲が狭くて、誰が誰なのかを

把握できるものではないのだが。

これが犯罪で使用されたら危険だろう……いや、楔の幽霊の方が危険じゃないか？

確か普通に盗撮とか盗映とか出来るんだよな。

——ふと、妙な視線を感じた……セシリアの者でもないし、学園の男子のような嫌な感じの視線でもない。
一体なんなんだ？

『織斑、何をしている。楔の居る学園を覗いていないでとっと降りて来い』

通信で千冬姉からおしかりの連絡が………なんで藍越学園を見ているってばれたんだ！？

『お前の考えぐらいお見通しだ』

「一夏さん……楔とは誰の事ですか？女性らしい名前ですが」

確かに名前の感じからすれば女性にしか思えないだろうけど。

……いや、名前どころか容姿も女性そのものだったな。

「一番付き合いの長い親友だよ」

そう言ったら、セシリアが顎に手を当てて、何かブツブツと呟き始めた。

時折、強敵とか聞こえてくるんだが、面識でもあったのか？

『二人ともとつと、降下しろ。目標は地上から10センチだ』

多少怒気が混ざった声を聞いて、俺は顔を青ざめた……セシリアも似たような状況だ。

千冬姉を怒らせると、後が物凄く怖いので、俺とセシリアは慌てて降下し着地、もとい

墜落してグラウンドに穴を開けてしまった——二人とも着地のことを忘れて慌てすぎたようだ。

体はGや衝撃から守られていたのだが、クラスメイトたちの呆気に取られた視線が

物凄く痛い、せめて笑うとかしてもらえた方が心にダメージを負わなかったのに。

「誰が墜落しろといった」

千冬姉、せめてもう少し優しい声色で言ってくれ。

side: end

「こっちを見ているのは一夏か？いや、他の男子の可能性も——

——無いな」

教師不在の最中に、体育の監視をやっている最中。

焦点のあっていない視線を感じた為、渡されていた双眼鏡を【Star Platinum】に

持たせて、視線の感じる方向を見た。

幽霊の感覚からは一人の人間が見えるとしか感じる事が無かったのだが、

見覚えがある姿だったので、一夏だろうとしておいた。

ISを纏っているし、シルエットは男みtaiであるし、四分の一の確立だし間違いではない筈だ。

「まあ、それはさておき、授業の監視をしなければ」

そう言つて再び視線をサッカーをやっている男子たちに戻す。

ちなみに女子は今頃卓球でもやってる筈だ。

「田井中さん。ハンドですわ」

「げ！何でばれた」

他の人には見えないようにやっていたらしいが、あいにくと動体視力は拳銃の弾を

掴み取るような精確な動きをするものが居るので、その程度の一瞬の光景でも

見逃すようなへまはしない。

にしても、普通にしらばっくれればよかったのに、素直というかなんというか。

「減点1」

「そんな殺生なー!？」

「冗談よ冗談、だから真面目にしなさいよ」

orz状態になっている田井中に言葉をかけつつ、適当に辺りを見渡す。

「その隅でさりげなくサボってる宮木君、減点3」

突っ立っているだけだった宮木に減点勧告を出し、土下座されるまでその評価のままにしておいた。
ひどくどうでもいい事なのだが、先生は結局授業終了まで戻ってこなかった。

顔色が悪かったので理由を聞いたところ、腹痛でアレ気味だったらしい、最近一日に十回以上もトイレの世話になっているそうだ。

………食事の幽霊を使って治そうかと思ったが、ショック死されても困るのでやめておいた。

「こんばんわ、お姉さん（偽）による愚痴を聞く時間がやってまいりました」

『何を言ってるんだお前は』

一夏の番号で着信が着たので、多少ハイテンションで電話に出たのだが、

電話から聞こえてきた声は一夏のものではなく、千冬さんのものだった。

やべ、お姉さん（偽）モード使用できないよこれじゃ。

まあ、そもそもが男口調じゃないと一夏が許可しないから最初だけなんだけどね。

「千冬さんから連絡なんて珍しいですね。しかも一夏の携帯を使つてとは」

『事情があつてな、携帯は修理に出してある』

「学園の電話は？」

『私用で使うわけにもいかないだろう』

緊急性のない私用で電話をかけてくるのが珍しいんですけど。

一夏の荷物運搬は、まあ、信用できる人間に任せたかったというのがあつたろうし、

天気の変化も、原因が俺しか居ないと判断して修正しろといつてきただけだし。

『ところで、常城、最近近辺で妙な事が起きてないか？』

「妙な事、ですか？」

冷や汗が出てきた。

もしかしたら、ヌイグルミを獲得してからのお出来事が見抜かれてい

るのかもしれないという

思いからだ……正直、あまりばれては欲しくなかった。

「いやー、特にないですねー」

『私のヌイグルミを獲得した辺りから起ったそうだな』

「……………まさか、千冬さん幽霊使えます？」

『……………凶星か、いや……………犯人に心当たりがあるし、その人物から連絡がきたただけだ』

ここで、俺はグルなのか？という考えに到らずに、

「あー、ちーちゃんって千冬さんの事なのか。ならいつくんは一夏だな」
と思ってしまったのは異常なのだろうか。

「私、束さんとは面識がない上に、道端の石ころ扱いですよね」

『幽霊の事を認識されたからだろ』

面倒ごとになるから話さなかったんだ、とは千冬さんの弁。

まあ、扱いようによつてはISを上回る危険性を保持してるしねー。
天候を支配できたり、時間を止めれたり、相手に命令を書き込めたり、遠距離の人間には

ディスクで命令を埋め込みめたり、あらゆる攻撃から身を守れたり。
鏡の世界に移動できたり、平行世界に移動できたり、無機物を生物に出来たりe t c e t c

「ばれるようなヘマはしてない筈なんですけど」

『映像を見せてもらったが、手品で誤魔化せる範囲じゃないだろう。』

まあ、確かにテレビとかではあのような現象以上の不可解な現象を引き起こしているのもあるし、

一回目だったから普通の人間には誤魔化せてはいたようだが』

その自他共に認める天才科学者には何の意味もなかった、と。そういうわけなのだろうか。

『まあ、安心しろ。おまえ自身が私と一夏・箒と交流を持っていたから、

危害を加えるよう………命に関わるような真似はしない筈だ』

それって命に別状がないのなら危害が加わるって言ってるのと一緒にですよ。

危害が加わるという部分を途中で区切られるとかなりの不安なのですけど。

『まあ、途中で飽きたらしいがな』

ずっとこけた俺はまったく悪くない。

何、さっき思わせぶりの危害が加わる宣言しておいて飽きたとか、そりゃ無いでしょう!?

『アイツは長い間同じものに手を加える事や持続する事をしないからな』

「じゃあ、危害が加わる危険は無いんじゃない——」

『だから、監視”は”やめるらしい』

物凄い特大の爆弾を投下されました。

「楔」

「どうした【White Snake】」

「鏡二連レ込ンダ者ワ居マスカ」

「鏡の幽霊は使ってないぞ。【Spice Girl】もどうし

——」

『どうした楔』

「ふむふむ、ちーちゃん以外と話している相手は誰なのかな？

もしかして噂の幽霊さんなのかな？」

兎の耳を装備した女性が鏡から這い出てきた。

何このホラー！

あ、俺も似たような事出来るから驚かないとか思ってる奴、自分しか出来ない事を

実際に目の前で同じ事を出来る存在を知らない状態で見かけたら驚くに決まってるぞ。

誰に言ってるんでしょうか、俺は。

『——その声、束か』

「やつほー。ちーちゃんお久ー」

現在絶賛消息不明な人間が目の前に居るって――
やばい面倒事フラグがやってきてしまいましたか、コレは。

「なるほど、鏡の世界に逃げられたら誰も発見できないわね」

「うん？鏡の世界を使って逃げ回ってるのは最近になってからだ
よ？」

『お前を監視していた時の行動を参考にしたらしい』

幽霊の特殊能力を科学で再現するって、どれだけ天才なんですかこの人。

ちなみに、今現在携帯の機能を使用して、千冬さんの声を束さんって人にも聞こえるようにしてある。

千冬さんという抑止力が無いと俺の身が危ない気がする。

まあ、始末するという意味なら【The World】で時を止めて【Star Platinum】と

一緒に何度もラッシュを加えていけば、倒せるだろうし、他にも殺す事を考えれば【Killer Queen】とか

その他諸々の幽霊で始末できるのだが、流石に一夏や千冬さんと親しい人間に対して行うのは躊躇われる。

そもそも一夏誘拐未遂犯ですら、ディスクで奇怪な行動をさせておくにとどめておいたのだから。

そっぴや【Killer Queen】の能力を最後に使ったのってゴ。リ一匹を爆弾に変えて、

小型の幽霊で追跡させて巣に帰った時に爆破させたのが最後だった
ような気がする。

死体の破片を残さずに処理したのは良い思い出。

「ねえねえ、昨日いっくんに言ってたアレの料理って何？」

「……一夏とのデート（笑）が完璧に覗かれていたとは」

『あの心臓に悪い料理か、正直生きた心地がなかったぞ。

寝不足だといった時には特注の水で有り得ん量の涙は流させるし、

一夏が下し腹で腹痛の時に食べさせた時内臓が飛び出るのを見たときはな。

まあ、完璧に治ったし苦痛も一瞬だけだったらしいが』

もう隠す気は無いとは言え、色々とぶっちゃけ過ぎです千冬さん。でも、微妙にトラウマにさせちゃった気もするんだけどね、アレ。そして目の前の女性がなんかもう、眼を輝かせて俺を見ている方が居るんですが。

「ふんふん、世界も見捨てたもんじゃないね、束さんが想像もつかないような

凄い事を行える人間が居るんだから」

「鏡に入る能力に関してはアンタも出来てたじゃないのよ」

警戒しつつもいつでも抜け出せるように【Enigma】で自分を収納し、

【The World】で時を止めながら逃げる用意だけは整えておく。

この人自身恐怖を感じるのはおそらくホキホキに手を出される事だろうが、

そんな事俺だつてしたくないので紙に収納は不可能だろう。

『ところで楔、私を呼ぶのに射程距離は十分か？』

「——ギリギリつてところですかね」

「へ？」

『ならば呼べ、初対面で束と話していても疲れるだろうから私が仲介してやる』

その千冬さんの意見に俺は多少思考にふけて——
携帯の充電とかヤバイ。

ついでにこつちから掛けたから料金がヤバイ。

「このヌイグルミで良いか【Wired】」

ヌイグルミを疑似餌とし、そのまま腕から出した釣り糸を垂らす。
目標は千冬さん。

「ヌイグルミが消え——」

「『対面では久しぶりだな束』」

「……いやー、何キ口も離れた位置から人を呼ぶなんて——
——いや異世界にいけたり

鏡の世界に入れる地点でそんなに不思議じゃないかな」

予想してたけど、まったく驚いてないよこの人。
とりあえず、お茶でも用意しておこうかな。

「なんか飲み物いります？」

「水以外だ」

「涙があふれ出るといふ水を所望しようかな？」

残念ながら、その性質の水は置いてない上に寝不足気味の人にしか効果はありません。

「お邪魔します楔、俺はお茶で」

「ひ、久しぶりだな」

何故居る、一夏とホキホキ。

第五話（後書き）

はい、????の人物の種明かしでした！。

うん、バレバレだったから意味ないね。

そしてようやくヒロインの筈と対面させられた。

今回はちょっとした話し合いのようなですね、多分。

尚、主人公はレクイエムとか最終進化とか遺体特典とかの

ぶっ飛んだ能力は使用できないのであしからず。

メイド・イン・ヘブンならやろうとおもえば条件そろえれば

出来るんですけどね^^；

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1557s/>

I S I c h i k a & S t a n d u s e r 一夏とスタンド使いと

2011年5月7日15時03分発行